
クレヨンしんちゃん～スパイの日常～

カゲロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クレヨンしんちゃん〜スパイの日常〜

【Nコード】

N6019S

【作者名】

カゲロウ

【あらすじ】

【黄金のスパイ大作戦】が終わってからヘーデルナ王国で暮らしていたレモンたちスパイ一家。その一家が何と春日部にやってくる。この物語は、しんのすけとその仲間たち、そしてレモンとその両親の日常の物語です。

プロローグ

ここは、ヘーデルナ王国にある一つの家。

レモン「はあく、しんちゃん元気かな。」

プラム「なあ、ライム。最近レモンの様子がおかしくないか？」

ライム「ああ、きつと合鍵……。いえ、しんのすけ君の事を考えているのよ。スカシペスタン共和国にいたころは、一流のスパイになるための訓練ばかりさせて初めてできた友達がしんのすけ君だから。」

プラム「そうか。……。ライム一つ相談があるんだが？」

ライム「何？」

（両親が何やら相談中）

プラム「レモン、今から引越す準備をしなさい。」

レモン「なんで？パパ。」

ライム「春日部に引越すからよ、レモン。」

レモン「えっ？」

プロローグ（後書き）

初めて書くので短いです。続きを書くかどうかは、分かりませんが、感想があれば書くと思いますので感想をお待ちしております。

第1話 親としての務め（前書き）

とりあえず第1話更新です。

しんのすけ「なんでオラの小説なのにオラの出番がないの？」

レモン「我慢してしんちゃん。次回は、出てくると思うから。」

第1話 親としての務め

突如両親から春日部に引越すとされたレモン。

レモン「え、えーと何で春日部に引越すのパパ、ママ？」

ライム「あなた最近野原しんのすけのことを考えているでしょ？初めて出来た友達は、大切にしないといけないわよ。」

プラム「お前には、訓練ばかりさせてあまり話を聞いてあげられなかったからな。友達のところまで引越すぐらい訳ないさ。」

そうやってプラムは、レモンの頭を優しく撫でた。

レモン「でもお仕事とかどうするの？」

プラム「仕事？レモン、一応私もエリートスパイだぞ。仕事なんか腐るほど見つけれさるさ。」

そう言いながらプラムは、大笑いした。

レモン「でもそんな私の我儘だよ。そんな無理してパパやママが叶えなくても……。」

それを聞いたプラムは、笑いを止め真剣な顔をした。それを見たレモンは、怒られるのかと思いきや怯えた表情をしたがプラムの発言は、レモンの予想と大きく違っていた。

プラム「……レモン、子供は、我儘を言うものだ。そしてその我儘を出来るだけ叶えるのは、私たち親としての務めだ。」

そう言った後プラムは、静かに微笑みながらこう言った。

プラム「だから気にする必要なんか無い。」

ライム「さあ、レモン。分かったら早く準備しなさい。」

レモン「……はい。」

そうやってレモンは、部屋を出て行った。

プラム「なんだか思ったよりも嬉しそうじゃないな。まさか思い過ぎだったか？」

ライム「そうでもないみたいよ。」

その頃廊下では・・・。

レモン「またしんちゃんに会える。もしかしたらしんちゃんを救出するときに手伝ってくれたあの子たちとも会うかもしれないな。友達になってくれると嬉しいけど・・・きつとなってくれるよね。」
そういうとレモンは、無意識のうちに嬉しそうに小さくガッツポーズをした。

イツハラ「お嬢様、お引越しの準備お手伝いしましょうか？」

レモン「ありがとうイツハラさん。」

2人は、レモンの部屋に行った。

ライム「ほらね？」

プラム「本当だ。」

～次の日～

プラム「じゃあ、行くぞ。」

ブルルン、ブオー。（車のエンジンをかけた音）

レモン（～）

こうしてスパイ一家は、春日部に向かった。

第1話 親としての務め（後書き）

というわけで春日部に行きました。文才が無いので読みずらいかも
しれませんがそこは、温かい目で見てくださいと幸いです。

第2話 再び出会う嵐を呼ぶ五歳児とスパイ少女（前書き）

今回は、短いです

第2話 再び出会う嵐を呼ぶ五歳児とスパイ少女

スパイ一家が国を出た次の日・・・春日部では

TVのアクション仮面

「わははははは、今日もアクション仮面の勝利だ。ありがとう良い子の皆、それでは、また来週さようなら」

しんのすけ

「・・・・・・・・」

大好きなアクション仮面を見ているはずなのにいつもよりも遙かに静かな野原しんのすけ

みさえ

「しんちゃん、お昼ご飯の準備手伝って」

しんのすけ

「ボソリ（うるさいおばさんだな）」

みさえ

「ぬあんですって、しんのすけどういことよ。最近ボ〜としてばかりで」

言いながらしんのすけに拳骨を一発渡したみさえ

しんのすけ

「母ちゃん、本当に静かにしてて!!」

みさえ

「まだそんなことを・・・しんのすけ、あなたまさか・・・?」

みさえは、テレビを見ながらいきなり怒鳴ったしんのすけを怒ろうとしたがしんのすけが今見ているアニメを観てその怒りは、消えたしんのすけが見ているアニメは、スパイの女の子が活躍するアニメだったからだ・・・

しんのすけ

「オラ達は、最高のコンビだったんだぞ・・・、だからもう一度会いたいぞ。母ちゃん、オナラ王国に遊びに行きたいぞ・・・レモンちゃんに会いに行きたいぞ」

みさえ

「へーデルナ王国ね。気持ちは、分かるけど無理よ、大体あなた明日幼稚園でしょ？」

しんのすけ

「母ちゃんのケチ」

みさえ

「・・・」

みさえは、言い返したかったがしんのすけがテレビを見るのを邪魔したくなかったのと少し気持ちが分かるのとで何も言わずにキッチンに行った

ピンポン

みさえ

「はい、どちら様ですか？・・・しんちゃん早く来なさい！」

しんのすけ

「今TV見てるから無理」

みさえ

「そう、じゃあTVが終わるまで待っててレモンちゃん」

しんのすけ

「ピクッ」

しんのすけは、その言葉を聞いた瞬間走って玄関に来た

しんのすけ

「レモンちゃん何処？」

レモン

「久しぶり、しんちゃん」

今ここで嵐を呼ぶ五歳児とスパイ少女が再び出会った

第2話 再び出会う嵐を呼ぶ五歳児とスパイ少女（後書き）

というわけで再会しました。次回は、今の続きから

第3話 再会（前書き）

今回は、レモンとしんちゃんとの再会です

第3話 再会

しんのすけ

「レモンちゃん・・・会いたかったぞ」

言いながら走ってレモンに抱きつくしんのすけ

レモン「しんちゃん／＼／＼わたしも会いたかったよ」

みさえ

「でもなんで春日部に？まさかスパイのお仕事ですか？」

ライム

「いえ・・・最近レモンの元気がなくて、どうやら初めてお友達になったしんのすけ君のことを気にしていたみたいなので今まで娘に無理をさせていた分何とかしようと主人と話をした結果しばらく春日部に引越すことにしたんです。」

みさえ

「そうなんですか、実は、今さっきしんのすけもレモンちゃんに会いたって駄々をこねていたんですよ」

プラム

「そいつは、良かったですな」

しんのすけ

「おお、そうだぞレモンちゃん一緒にアクション仮面を観よう」

レモン

「うん、観ようか？良いかなパパ、ママ？」

プラム

「良いよ、パパたちは、もう少し話しているから観ていなさい」

しんのすけ

「やったぞ〜！」

そういつてレモンとしんのすけは、リビングに行った

みさえ

「あ、立ち話も何ですからどうぞ中にお入りください」

ライム&プラム

「お邪魔します」

そういつて親たちもリビングに行った

アクション仮面

「行くぞ！アクションビーム（ビュビュビュ）」

怪人

「ぎゃあああー！」

しんのすけ

「おお〜、かっこいいぞアクション仮面」

レモン

「確かにかっこいいね」

プラム

「そういえば今日は、仕事の契約があるからパパもママも帰らずにイツハラさんも……」

イツハラ

「お嬢様とご主人さまと奥様の家族のひと時を邪魔したくないので3日程お暇をもらいます」

プラム

「と言ってどこかに行ってしまったんだが……レモン大丈夫か？」

レモン

「大丈夫だよ、私は、……一人でも」

少し悲しそうだがすぐに笑顔でそう言うレモン

プラム&ライム

「……」

周りが沈黙してしまった

しんのすけ

「んじゃあ、うちに泊まれば？」

その沈黙を簡単に壊すしんのすけ

レモン

「……」

ライム

「確かにそれならばこちらも願ったりだが……どうですか？」

みさえ

「一応今から主人と話してきます」

みさえも泊まることには、賛成らしくすぐにひろしに電話しに行った

ひろし

『どうした〜みさえ、何かあったのか?』

会社でコーヒーを飲みながらそう訊くひろし

みさえ

「ねえ、今日レモンちゃん家に泊めても大丈夫?」

要点しか言わないみさえ

ひろし

『! ! . . . レモンちゃんってあのレモンちゃんだよな? 春日部に來てるのか?』

驚きでコーヒーを零しながらそう聞くひろし

みさえ

「あのレモンちゃんって他に誰が居るのよ . . . そう、レモンちゃん一家が春日部に引っ越したんだけど今日レモンちゃん一人なんだって、だから家に泊めてあげない? しんちゃんも久しぶりにレモンちゃんに会えてかなり喜んでるし」

ひろし

『そういえば最近しんのすけ元気無かったな . . . よし分かった今日は、家に泊めてやれ。俺も今日は、頑張つて早く帰る』

みさえ

「分かった . . . じゃあね」

そう言いみさえは、電話を切った

ひろし

「さあ〜て、頑張るか!!」

ひろしも何故か気合を入れていた

みさえ

「良いって」

しんのすけ

「やったぞ〜、正義は、勝つわ〜はっはっはっは」

しんのすけは、喜びのあまりアクション仮面の真似をしていた

しんのすけ

「ほら、レモンちゃんも」

レモン

「ええ!う〜ん遠慮しておくよ」

しんのすけ

「レモンちゃんは、オラと一緒にスパイをしたのにアクション仮面の真似は、しないの?」

レモン

「うう・・・わかったわよ。わ〜はっはっはっは／／／／／／赤くなりながら小さい声でアクション仮面の真似をしたレモンだった。それを驚いた後に優しい笑顔で見ている親が3人居たとか・・・

プラム

「じゃあ、お願いします」

ライム

「レモン、一応良い子でね」

レモン

「うん。パパ、ママ」

みさえ

「じゃあお預かりします」

そんなこんなでプラムとライムは、仕事に行きレモンは、今日野原一家に泊まることに

第3話 再会（後書き）

感想お待ちしております

第4話 デリカシーって必要だよね（前書き）

最初に言います。しんのすけにデリカシーは、ありません

第4話 デリカシーって必要だよね

レモンが野原家に泊まることになった夜

しんのすけ

「レモンちゃん、一緒にケツだけ星人やろう」

レモン

「・・・あ、みさえさん、私お料理手伝います」

みさえ

「あら、ありがとうレモンちゃん。でもお客なんだからテレビでも観ていても良いのよ」

レモン

「いいえ、手伝います」

みさえ

「あ、ありがとう」

しんのすけが変な発言をした瞬間レモンは、夕飯の支度をしているみさえの手伝いをしだした

しんのすけ

「レモンちゃん何でオラ無視されているの?」

レモン

「デリカシーが無いから」

みさえ

「デリカシーが足りないからでしょ？」

しんのすけの質問にみさえも同じ答えで返す

しんのすけ

「で、でも前は、レモンちゃんも一緒にケツだけ星人をやったじゃん」

レモンは、映画でメガヘガデル？をナクヲオ&ヨースル（映画のラスボス）に食べさせるためにしんのすけと一緒にケツだけ星人をやった事は、あるが・・・

レモン

「あの時は、緊急事態だから仕方なくやったの。もうやらない」

レモンは、あっけなく返した。レモンが再びケツだけ星人をやる緊急事態は、果たしてまた来るのか・・・

みさえ

「お風呂が沸いたからレモンちゃん入る」

レモン

「ありがとうございます」

しんのすけ

「じゃあ、行こう」

と言いレモンとしんのすけは、風呂場にい・・・

レモン

「待った！何でしんちゃんが来るの？」

しんのすけ

「久しぶりにあったから裸のお付き合いがしたいぞ」

レモン

「は、裸のお付き合い／＼／＼／」

しんのすけ

「そっだぞ、」

レモン

「それは、また何時かね。というかしんちゃんは、もう少しデリカシーが羞恥心を持ちなさい」

とりあえず入ったら色々やばいと感じたレモンは、ごまかした。

ひろし

「ただいま」

みさえ&しんのすけ&レモン

「「「おかえりなさい」「」」

時間も経ちひろしが帰宅した

ひろし

「おお、レモンちゃん本当に春日部に来たんだな」

レモン

「これから色々お世話になります」

しんのすけ

「そうそう、オラに会いに来たんだぞ」

レモン

「し、しんちゃん／＼／＼」

ひろし

「ん、どういうことだ？」

みさえ

「実はね……」

こうしてみさえは、レモンが春日部に来た理由とついでにしんのすけが元気なかつた理由を話した

ひろし

「なるほど、会いたがっていた二人が会えたということか感動するね」

みさえ

「さ、食事は、もう用意しているから食べましょ」

ひろし

「ははは、それは、しんのすけお前が悪い」

しんのすけ

「でもケツだけ星人と一緒にやった仲だぞ」

レモン

「あれは、緊急事態だからしょうがなかったんだってば」

みさえ

「しんのすけは、デリカシーが足りなさすぎるわね」

四人は、先ほどのことで盛り上がっていた

みさえ

「しんのすけそろそろ寝なさい。レモンちゃんも今日は、もう寝れば？」

しんのすけ

「ほっほ、いい、レモンちゃん一緒に寝よう」

レモン

「だから……」

みさえ

「あ、でも今お客さん用の布団をみさえが持って行っちゃったからレモンちゃんのお布団無いのよね」

みさえは、すまなそうに言った。ちなみにみさえはみさえの妹である

しんのすけ

「それにオラレモンちゃんと久しぶりに会ったのにあまりお話ししていないぞ」

レモン

「・・・そうだね。私もしんちゃんと一緒にお話したいな」
こうしてレモンとしんのすけは、一緒に寝ることにした

みさえ

「と言うわけで今は、二人とも寝ているわ」

ひろし

「まあ、明日は、日曜日で幼稚園もないしゆっくり夜更かしさせてやるか」

みさえ

「そうね」

しんのすけ

「と言うわけでアクション仮面は、かつこいいんだぞ」

レモン

「本当にアクション仮面が好きなんだね」

しんのすけ

「うん、でも今は、レモンちゃんも好きだよ」

レモン

「しんちゃん／＼／＼／＼（お友達としてよね）」

またしんのすけは、デリカシーのない言葉を言いレモンは、恥ずか
しがっていた

しんのすけ

「オラまたレモンちゃんに会えてよかったぞ」

レモン

「うん、私も」

この言葉を最後に二人は、夢の世界に突入した

こうして一日は、優しく過ぎて行った

第4話 デリカシーって必要だよね（後書き）

感想お待ちしております

第5話 スパイの家へGO！（前書き）

今回は、野原一家がスパイの家に行きます。

第5話 スパイの家へGO!

レモンが野原家に泊まってから一日が経過した

レモン

「うーん、朝か・・・あれ此処どこだっけ?・・・そうか確か昨日野原家に泊まってしんちゃんと一緒に寝たんだノノノ」
昨日を思い出してリビングに行くときみさえが朝ご飯の準備をしていた

レモン

「おはようございます、手伝います」

みさえ

「おはようレモンちゃん、ありがとね」
こうしてしんのすけとひろしが起きるまで二人で朝ご飯の準備をしていた

しんのすけ&ひろし

「おはようレモンちゃん」
二人も起きてきた。だが・・・みさえを無視したためにまた眠ることになったという

レモン

「これが・・・普通の家族」
レモンは、震えながら呟いた

男たちが生還して朝ご飯を食べ終わりくつろいでいるとインターホンが鳴った

プラム

「レモン迎えに来たぞ」

レモン

「パパ！ママ！」

ひろし

「ああ～おはようございます」

ライム

「おはようございます、レモンは、良い子でしたか？」

みさえ

「とっても良い子でしたよ」

プラム

「偉いぞレモン」

レモン

「えへへ～！」

プラムに褒められてレモンは、心から嬉しそうにした

プラム

「今日は、仕事は、無いしとりあえず帰るか？」

しんのすけ

「レモンちゃんのお家見たいぞ～！」

プラムが予定を言つとしんのすけは、突拍子もなく言つ

みさえ

「ち、ちょっとしんのすけ!？」

ライム

「そうね・・・確かに同じ町になったんだから・・・よかったら来ますか？」

しんのすけ

「ほっほい、行くぞ」

ライムの誘いに野原一家が応じ全員でレモンたちの家に行くことになった

ひろし

「・・・ほう？」

ひろしの目の前には、野原家よりも大きい一軒家があった

プラム

「ここが私たちの家です」

みさえ

「で・・・でかいですね」

ライム

「イツハラさんが何故か手配していたのです。まあ、ここならスパイの活動もできるので助かりますが」

しんのすけ

「レモンちゃんの部屋へGO!」

しんのすけは、そういうと家に入っていった

レモン

「待ってしんちゃん!」

しんのすけとレモンは、レモンの部屋へ向かい大人たちは、リビングに行った

しんのすけ

「おお、お部屋が広いぞ」

レモン

「なんか恥ずかしいな／＼／＼」

レモンの部屋にあるのは、机と椅子・ベッド・タンス・本棚と少しの本(全て小説)・スパイの道具らしきものだった。ぬいぐるみとかおもちゃは、何もなかった

しんのすけ

「レモンちゃん普段何をしているの?」

レモン

「く・・訓練とかだよ。みんなのところに行こう」

しんのすけの質問で少し部屋を出ていきたくなったレモンは、しんのすけと一緒にリビングに行った

そこでは、大人たちが話していた

ひろし

「ハハハハ、ところでプラムさんは、何の仕事をしているんですか？」

ビール（プラムが出したのでみさえは、何も言わない）を飲みながらそう聞くと

プラム

「政治関連をやっています」

同じくビールを飲みながらそう言う

ひろし

「！？本当ですか？」

ひろしは、驚いてビールを落としそうになりながら聞く

レモン

「パパ本当に？」

レモンもプラムの仕事を聞くのは、初めてだったので驚いた。しかも親が政治関連というのは、最初レモンが野原家を騙すために使った嘘の一つだからだ

プラム

「まあこれでもエリートのスパイですからね」

プラムは、そういいながらビールを飲む

ライム

「因みに私は、その秘書をしています。だからレモン・・・パパとママは、これからも忙しくて前ほどじゃなくても一緒に話した

りする時間が少なくなるけど許してくれる?」「
ライムが少しバツが悪そうにそう聞くと

レモン

「大丈夫。ここには、しんちゃんとか野原家の皆さんもいるから・・・だからお仕事頑張ってね」

レモンは、少し悲しそうにそう言った

プラム&ライム

「レモン・・・」

ひろし

「また何かあればうちで預かりますので」

みさえ

「レモンちゃんは、良い子だからうちも歓迎ですよ」

ひろしとみさえは、そうライムとプラムに言う

プラム

「そうですね・・・これからは、レモンの事も含めてよろしく願
いします」

ライム

「よろしく願います」

みさえ&ひろし

「「こちらこそよろしく願います」

しんのすけ

「レモンちゃんこれからよろしく」

レモン

「うん、よろしくねしんちゃん！」

その日スノモノ家は、笑いに包まれたという

第5話 スパイの家へGO！（後書き）

スノモノは、レモンたちの名字です。感想お待ちしております

第6話 スパイと春日部防衛隊（前書き）

今回からキャラのセリフに名前を付けるのを辞めることにしました。
後春日部防衛隊は、レモンのことを忘れたということになります

第6話 スパイと春日部防衛隊

「レモンちゃん、遊ぼう」

レモンの家に行った次の日幼稚園を終えたしんのすけは、レモンの家になんと間違えずに遊びに来ていた

「ああ・・・しんちゃん。良いよ ちよつと待つてて」

レモンは、そう言いながら家から出てきた。因みにレモンは、一応来週から小学校に通うことにした。ライム曰く「この国のルールに従う」とのことらしい

「今日は、風間君たちと遊ぶから一緒に公園に行こう」

「風間君って確かあの時の・・・大丈夫かな？」

レモンは、かつて芸能界の人間として春日部防衛隊をだましたために少し不安だった

「ああ・・・それだったら大丈夫だぞ。母ちゃんが何とかごまかしたしあれから何日もたっているからおそらく忘れてるぞ」

「そうかな・・・」

と言いながら二人は、公園に行った

「遅いじゃないかしのすけ！」

「あれ、しんちゃんその人誰？」

「見かけない顔」

「紹介しなさいよ」

上から風間・マサオ・ボーちゃん・ネネが言う。驚くことにみんなレモンのことを忘れていた

「（本当に忘れていた）初めまして、私はスノモノレモンといいます。最近此処ら辺に引っ越してきました」

レモンは、自分が忘れられていることに半分悲しみ半分喜んだ状態で自己紹介をした

「へえ、僕は、風間トオルさ。よろしくレモンさん」

「ぼぼ僕は、佐藤マサオです。よろしくレモンさん」

「僕は、ボー。ボーちゃんと読んでください。レモンさん」

「私は、桜田ネネよ。よろしくね。レモンちゃん」

「よろしく」

5人は、それぞれ自己紹介を終えた後サッカーをすることにした

「邪魔だよしのすけ！ボールを取りに行け！」

「うーん、風間君のい・け・ず」

「シュート」

「うわあわわわ」

「こらー、このおにぎりちゃんとボールを取りなさい！」

一応今レモン&しんのすけ&ボーVS風間&マサオ&ネネのチームでサッカーをやっており現在しんのすけは、風間にちよっかいを出しレモンは、ゴール(ベンチ二つ)にシュートを決めマサオは、ゴールキーパーなのでとうとうとしたが完全にとれずにネネは、それを怒りボーちゃんは、その光景を見ていた

「凄いねレモンさん。僕全然とれなかった」

「まあ・・・一応私の方が年上だからかな？」

マサオとレモンが話していると・・・

「おい！何この公園で遊んでいるんだよ！ここは、俺たちハイパー炎団の縄張りだぞ」

小学生らしき男の子が3人変なことを言いながら来た

「あ・・・あの人たちは、近所でもいじめっ子で有名な小学生だよ」
マサオは、怯えながら言う

「随分と子供っぽい言い方がかりね」

「なんだと・・・てめえ。ぶち殺すぞ！」

レモンが正直な感想を言うとそいつらの中で一番体がでかく態度もでかそうな少年がレモンを脅してきた

「危ないよレモンさん。ここは、退散しよう」

「大丈夫よ、あんな人たちなんか」

風間がレモンにそういうがレモンは、簡単に言い返した

「もう怒ったぞ・・・このお！」

少年は、レモンにパンチをしてきた

「ふう・・・下がっててみんな！」

しかしレモンは、風間達にそういうと少年の拳をかわして少年の腹を蹴った

「親分！」

少年の後ろにいる男の子たちは、驚きながら少年の心配をする

「くそ・・・おらおらおらおら」

「遅い遅い」

少年は、レモンに何発もパンチを繰り出しているがレモンは、余裕でかわしていた

「ダメだぞレモンちゃん。ちゃんと手加減してあげないと」

「そ〜お？」

しんのすけがレモンに助言(?)するとレモンは、余裕の表情で聞いてきた

「ふざけるなあああー!!」

少年は、完全に怒りレモンに思いきりパンチするが・・・

「はあ！」

レモンは、その手をつかみ少年の勢いを利用して背負い投げをきれいに少年に決めた

「い……いてえよ……くそ、覚えてるよ……！」

少年は、何とか立ち上がるとそう言いながら男の子たちを連れて泣きながら逃げて行った

「あなたが負けたのを覚えておくの？」

「うるせえ……！」

レモンが冷やかすと少年は、叫びながら公園を出て行った

「か……かつこ良い。凄いよレモンさん！」

「うん、確かに今は、さすがの僕でも感動したよ。」

「そ……そんな、大したことじゃないよ……」

マサオと風間がレモンを褒めたのでレモンは、少し恥ずかしそうに答えた

「あなた……気に入ったわ。春日部防衛隊に入りなさい」

ネネがレモンに突然そう言ってきた

「春日部防衛隊って何？」

「春日部の平和を守る正義の組織さ」

レモンの質問に風間が答える

「それって……私と友達になってくれるってこと?」
レモンは、少し期待を込めてそう聞くと

「あなた……何言ってるのよ」

「え?」

ネネの言葉にレモンの期待は、無くなってしまった

「私たちは、もう友達でしょ?だから防衛隊に誘っているのよ」

ネネの言葉を聞いたレモンは、自分が何を言われたのか理解できずに一瞬フリーズしてしまった。そのあと慌てて

「え……え……だって……はい」

「レモンちゃん落ち着いて」

しんのすけは、慌てるレモンの耳に息を吹きかける

「キャ!へな〜〜」

レモンは、小さく悲鳴を上げると思わず座り込んでしまった

「しんちゃん何するのノノノノ」

「リラックスだぞ〜」

「でどう?防衛隊に入ってくれるかな?」
風間がレモンに聞くと

「うん………ありがと。入らせてもらっわ」

「じゃあ〜みんなであれを言いましょ」

「あれね、言おう言おう」

レモンが入ると言つとネネは、【あれ】を言うことを提案しマサオが賛成する

「あれって何？しんちゃん」

「うん・・・ゴシヨゴシヨ」

「しんちゃん、ゴシヨゴシヨじゃわからないよ」

「本当は、~~~~~だよ」

「へえ・・・ちよつと恥ずかしいな・・・まあ、良いか」
しんのすけから話を聞いたレモンも賛成する

「じゃあ・・・いくぞ」

しんのすけがそう言つと

「~~~~~春日部防衛隊・・・ファイアー！！！！！！」

全員で大きくそう言つた

第6話 スパイと春日部防衛隊（後書き）

とりあえずレモンが春日部防衛隊に入りました。感想お待ちしております

第7話 恐怖の遊び（前書き）

今回は、みんなであの遊びをします

第7話 恐怖の遊び

レモンが春日部防衛隊に入った次の日みんなで公園に集まって何して遊ぶか考えていた

「何にしようか？」

「サッカーなんかどうかな？」

「鬼ごっこ！」

「死体ゴッコ」

「ボー、石拾い」

レモンの質問にそれぞれ風間・マサオ・しんのすけ・ボーちゃんやりたい遊び（？）を言っていくのだが……

「そうね、じゃあいつも通りリアルおままごとをしましょう はい 決定！！」

ネネが遊びを提案して決定する

「……え〜！？」「……」

もちろんそれに反論する防衛隊男子たち

「……何か文句でも？」

だがネネが低くそう聞いた瞬間……

「……ありません」「……」

明らかに何かある顔でみんなが了承した。レモンは、別になんでも良いので高みの見物だ

「じゃあ、はいこれ台本ね」

ネネは、みんなに何故持っているのかわからないが台本を渡し同じく何故持っているのかわからないシーツやら小道具を用意し始めた

「こ……これは、また本当にリアルね……」

レモンは、台本に書かれているそれぞれの役を見て唖然とした。役は、以下の通り

ネネ＝美人な人妻だが夫に暴行を受けている。最近医者風の風間に告白されたので夫との離婚も考え中

風間＝有名な病院の医院長をしている。ネネに惚れており告白もした

レモン＝ネネの友人。彼女のことを心配している。警察官

マサオ＝ネネの夫。彼女によく暴行している

しんのすけ＝弁護士

ポーちゃん＝飲み屋のおやじ

「じゃあ、始めるわよ」

ネネの言葉で恐怖の遊びは、始まった

リアルおままごと 開始

「お〜い、今帰ったぞ」

「おかえりなさいあなた。お食事は、もうできているわよ」

「食事〜ああ、もう食ったわ。だからいらね」

「そんな・・・電話の一本でもくれればよいのに」

「うるせえ！！俺が何しようとか俺の勝手だろうが！！」

マサオは、そう言いながらネネに暴力を振る

「や・・・辞めてください」

「ふん・・・俺に逆らうからだ」

マサオは、そういつてリビングに行く。その時電話もなった

「はい・・・ネネです」

ネネが電話に出ると

「ネネさん・・・僕です。風間です・・・お返事は、決まりましたか？」

電話は、風間がネネに自身の告白の結果を聞くものだった

「わたし・・・あなたのことが好きなんです私が居なくなったらあの人どこまでも追っかけてきそうで怖いんです」

ネネは、本心を風間に言う

「分かりました。良い弁護士を知っているので紹介しましょう。明日時間ありますか？」

「はい・・・あります」

「では、また明日」

風間は、そう言って電話を切った

「風間さん・・・そうだ！今日は、レモンと会った。行かなくちゃ」

ネネは、そう言っている飲み屋に行った

「というわけで私悩んでいるのよレモン」
飲み屋に着いたネネは、酒を飲みながらレモンに言う

「やっぱり風間さんと付き合いなさいよ。あの男が何かしたら私が逮捕してあげるからさ」

同じく酒を飲みながらレモンは、そう言う

「焼き鳥お待ち！」

飲み屋のおやじは、そう言って焼き鳥を机に置く

「レモンが警察官だっていうのは、心強いけどね・・・あっ、おやじさんビール追加お願いします」

「おやじごっちも頼む！」

「OK牧場」

おやじは、ネネとレモンの注文を受け取り新しいビールを渡す

「ま・・・飲もうよ。ネネ」

「そうね……」

二人の時間は、朝まで続いた……

「ネネさん。この人は、弁護士の野原です。きっと僕たちの力になつてくれるでしょう」

「野原です」

「ネネです。よろしくお願いします」

「どうだい野原君この場合離婚は、成立するかな？」
風間は、野原にそう聞く

「相手が嫌がっているんだから成立でしょう」
風間の真剣な口調に対し軽くそう言う弁護士の野原

「そうか……やりましたよ。ネネさん！」

「はい 風間さん」

話が終わりネネは、家に帰ってマサオを呼んだ

「あなた……お話があります」

「んだよ……そんなことよりも飯作れ!!」

ネネの話よりも自分の飯を優先するマサオ

「……離婚しましょう」

ネネは、それを聞きはつきりと言い離婚届（自分のところは、記入済み）を渡す

「お……おい、待てよ……冗談だろ……俺は、お前を愛しているんだからお前も俺を愛しているだろうがよ……悪かった。反省するから離婚は、やめてくれ!!」

マサオは、明らかに慌ててネネに許してもらおうとするが……

「さようなら」

ネネは、そう言って家を出ていく

「ま〜ち〜や〜が〜れ!!!」

逆上したマサオが金属バットを持ってそれをネネに振り下ろしたが・

……

「ぐっ……大丈夫ですかネネさん？」

風間が間一髪のところ腕でガードした

「まあ・・・医院長としての役が無かったけど僕のやる役としては、
ぴったりだったかな」

どこか自惚れ口調で感想を言う風間

「・・・」
「おにぎり」「りんご」「ごりら」「ラムネ」「
ネコ」「コアラ」「ライオン」「・・・しんちゃんの負け」「し
まったぞ〜!？」

途中から役が無かった二人は、しりとりをしていたった今しんの
すけが敗北した

「春日部防衛隊のメンバーは、みんな個性的ね。なんだかこれから
が楽しそう」

皆の様子を見てレモンは、笑顔でそう呟いていた

第7話 恐怖の遊び（後書き）

リアルおままごとの面白さが伝わってくればうれしいです。感想
お待ちしております

お話募集のお知らせ

しんのすけ

「何これ？」

レモン

「さあ？打ち切りのお知らせじゃないの？」

カオス（作者）

「いや違う違う。え〜と、言えることは、一つ。日常書くのも難しいな〜」

ひろし

「俺の足の匂いでもかくか？」

カオス

「まだ、死にたくないから断る。まあ……一応いくつか話のネタは、考えているんですが一応皆さんがどういつ日常を読みたいか？という意味も含めて話のネタを募集しようと思ひまして」

風間

「ネタ作りから逃げてるだけじゃないの？」

ネネ

「さいて〜い」

カオス

「……だって気になるだろ？みなさんがどういつ話を読んでみたいのか」

ライム

「一理は、あるわね」

プラム

「まあ……だいたい滅茶苦茶だな」

カオス

「だって気になるだろ!？」

レモン

「しんちゃんどう思う?」

しんのすけ

「どうでも良いぞ」

カオス

「おい!!」

みさえ

「とりあえず早く言いたいことを言いなさいよ!!!」

カオス

「俺ってこの小説での権力が皆無だな……まあ、良いや。え」と、メッセージでも感想でも何でも良いので書いてくれれば可能な限りそれでお話を書きたいと思います。内容は、薄くても全然かまいません。普通に「こんな話を読んでみたい」とかいう要望があれば満足していただけるかは、ものすごく心配ですが全力で頑張りたいと思います」

レモン

「因みに要望が無いから打ち切りってのは、ありえないので安心してください」

第8話 オラ、参上!! (前書き)

今回は、ディワールドさんからの要望で再びしんのすけがあれに変身する!!

第8話 オラ、参上!!

「今日もリアルおままごとよ!!」

春日部の公園では、ネネが再び遊びを提案していた

「~~~~え~~~~!!」「」

勿論反対する他の四人（レモンは、反対は、していないが苦笑いをしていた）

「……あら?こんなところにウサギがあるわ……ところで何か文句でも?」

ネネは、おままごとの道具の中からウサギのぬいぐるみを取り出しながら恐ろしい顔で周りに質問していた

「~~~~ありません」「」

しぶしぶOKする男たち。だが、突然頭が剥げている化け物が現れた

「この時代を変えてやるぜ!!」

その怪人ハゲイマジンは、そう叫びながらネネのウサギのぬいぐるみを盗りその毛を思いつきり引っ張りぬいぐるみが切れていた

「ああ、ネネのウサギ何するのよ!!」

ネネは、そう言いながらハゲイマジンを蹴るが「邪魔だ」と言われながら蹴り返された

「ネネちゃん!!」

レモンは、スパイヨーヨーをハゲイマジンにぶつけるが全く聞いていない

「ええい、邪魔だ」

ハゲイマジンは、そう言ってレモンをつかみ放り投げた

「きゃあああ！！！！」

「うわわわわわ」

「ボーーーーー！！！」

「危ない！」

マサオとボーちゃんと風間がレモンの着地点に先回りしレモンの踏み台になったので幸い誰もけがしなかった。そして、その時音楽と共に電車が空から現れた

「おい、良太郎！！こいつだぜ」

その電車。デンライナーから赤い鬼みたいな怪人、モモタロスが降りてきてそう言い同じく電車から降りてきた青年も「そうだね」と言いながらハゲイマジンを睨む

「あ、良君！！！」

しんのすけは、その青年、野上良太郎のところに駆け寄った

「あ、しんちゃん！ここは、しんちゃんのいる時間だったんだ。危ないから離れてて。モモタロス！！！」

「ん？ああ・・・すまねえ。行くぜ良太郎」

呼ばれたモモタロスは、しんのすけに頼まれて伝説のイマジンを呼び出していた

「変身！！・・・ってしんちゃん！！！」

良太郎がデンオウベルトを装着しようとしたところにしんのすけは、乱入してそのまま変身してしまった

「俺、参上!」

「オラ、参上!」

しんのすけもライダーに変身し仮面ライダーしん王が再び誕生した

『また変身しちゃった・・・』

電王の良太郎の意識は、ため息をついていた

「へ・・・とつとと行くぜ! って何しゃがる小僧!」

電王がデンガツシャーをソードモードに組んでいたらしん王がデンガツシャーソードモードを横取りした

「このヒマジンは、オラが倒すぞ!」

「てめえ・・・ふざけるな!返せ」

電王が取り返そうとしてもしん王は、かわしていた

「あいつは、みんなを傷つけたゾ・・・だからオラが倒すぞ!」

しん王は、そう言ってハゲイマジンに向かって行った

「あいつ・・・」

電王は、気絶しているレモンたちを見て状況を察したらしくおとなしくしていた

「ふん・・・くらえ!!ハゲフラッシュ!」

ハゲイマジンは、頭のハゲから眩しい光をしん王に浴びせた

「うう……眩しいぞ」

しん王は、そう言いながらふらふらしていたがみんなのことを思い出してハゲイマジンをデンガツシャーで斬った

「ぐわああ！この野郎……」

ハゲイマジンは、怒ってしん王を蹴る

「うわあああ！！」

しん王は、レモン達が気絶しているところに転がった

「ハゲフラッシュ」

ハゲイマジンは、再び眩しい光をしん王に浴びせる

「うう……眩しいぞ……あ、そうだ！」

しん王は、ふらふらしながら起き上がると何かを思いついたのかレモンの持っていたスパイヨーヨーを取った

「レモンちゃん……これ、借りるゾ」

しん王は、そう言うとヨーヨーを前の方に飛ばした

「ん？何だこれ？」

「よし、行くゾー！！」

しん王は、ヨーヨーがハゲイマジんに引っかかったのを確認するとヨーヨーを戻すように手前に引く。するとしん王の体は、ハゲイマジんに引っかかっているヨーヨーまで勢いよく飛んでいく

「オラの必殺技……ヨーヨーバージョン！！」

しん王は、そう言うと眩しい光の中目を瞑りながらデンガツシャーを前に押し出しそれがハゲイマジんに刺さってハゲイマジンは、爆発した

「おお、やるじゃねえかガキ!!」

「凄いねしんちゃん。イマジンを倒すなんて!!」

変身を解除した良太郎は、同じく解除したしんのすけを褒めていた

「いや、それほどでも……あるゾ」

そして、良太郎たちは、デンライナーに乗って元の時間に帰って行った

「あれ……あの、怪人は?」

気絶していた中で最も早く起きたレモンは、しんのすけにそう聞いたが

「レモンちゃんのおかげで倒せたゾ」
としんのすけが言っつてその後電王やらしん王やら言つたが誰も理解
することができず謎のままこの話は、終わってしまった

「じゃあ、リアルおままごとやりましようか？」
話を終えたらさっそくネネは、そう言っつていた

「うえっ、ヒマジン倒すより疲れるゾ」

第8話 オラ、参上!! (後書き)

うん………短いうえに自信が全くない。感想お待ちしてお
ります

第9話 レモンの友情奮闘記（前書き）

今回は、ニコさんの要望です。春日部防衛隊は、出ません。

第9話 レモンの友情奮闘記

「いってきま〜す!」

「「いつてらっしゅ〜い!」」

ある日の朝、レモンは、日本の社会に紛れ込むために「小学校」に向かっていた。

「おはよう」

「おはよう、レモンちゃん!」

「あ、おはよう。サヤカちゃん!」

レモンに挨拶をしたのは、国枝サヤカ。サヤカの親は、一流企業に務めているため前まで小学生や中学生が彼女から「お小遣い」をもらっていたがレモンが悩んでいる彼女に話を聞きそいつらを倒してサヤカは、解放されたため二人とも友達になったのだ。

「あの時のレモンちゃんかつこ良かったよね〜　　なんだから、スパイみたいだったもん」

サヤカは、前に見たドラマである任務中のスパイがマフィアに追われていた女性を「任務のついで」と言いながら女性を助けた主人公のスパイを思い出しながらそんなことを言ったが・・・

「そ・・・そそそそんなことないよ!!!」(どうしよう・・・
・行動が軽はずみすぎるかな?)」

レモンは、ものすごく慌てていた。

「じゃあ……朝の会を始めるぞ」

担任の若い男性が教室に入ってきて朝の会を始めて授業に入った。

「これ、分かる人。じゃあ、スノモノ。前で書いてみる」

「はい!!」

レモンは、スパイの訓練の中で様々な知識を会得しているので小学生の問題ごときは、軽かった。

「よし、正解だ」

「ちっ、あの女……つぶす！」

担任が正解の判定をしていると誰にも聞こえない声で生徒の一人である東光寺アカネがそんなことを呟いていた。彼女も実家が金持ちであり顔良し・頭良し・運動神経良しの三拍子そろっている（自称）ためクラスでもそこそこ人気があるのだが……レモンの方は、自分の全てを上回っており（例 駆けっこで負ける。自分の分からなかった問題をあっさり解かれる。などなど）彼女は、レモンのことを目の敵にしていたのだ。

そして、授業が終わりレモンとサヤカは、帰り道が少しだけ同じなので一緒に帰っていた。だが……そんな二人に三人の高校生らしき男たちが近づいてきた。

「お前がレモンちゃんか？悪いがお兄ちゃんたちと遊ぼうぜ」

「お、思っていたよりも可愛いな・・・調教して俺の妹にでもするかな？」

「はん！そいつは、面白い！！どんな形でも良いからこいつを落とせつてのが今回の課題だからな」

男たちは、そんなことを言いながら笑っていた。こいつ等は、アカネが金で雇った高校生たちであり本人たちも金と可愛い女の子が手に入るという理由でアカネに従っていた。

「・・・・・・・・サヤカちゃん。すぐに逃げて！！」

「危ないよレモンちゃん！！相手は、高校生だよ！！」

レモンに逃げると言われても心優しいサヤカは、逃げる事ができなかった。というか男達も逃がす気が無かった・・・・・・・・。

「いやいや、二人ともお兄ちゃんたちと遊ぼうよ。大丈夫 お兄ちゃん達は、優しいから な？」

「!?!・・・・・・・・(気持ち悪いけど・・・・・・・・まずは、サヤカちゃんを逃がさないと・・・・相手は、三人だからサヤカちゃんが危ないわね・・・・・・・・)」

レモンは、男の言ったことに寒気を感じながらどうするか考えていた。

「はははは！！このロリコン何小学生を誘惑してるんだよ」

「うつせー、こいつ等結構可愛いじゃん。将来は、有望だぜ！今のうちに手を付けておかないとな」

「よーし、始めるぜ」

と言いながら男たちは、二人に襲い掛かってきたが・・・

「はあ！！たあ・・・えい！」

男のうちの一人は、ヨーヨーで顔面を叩かれてもう一人は、足を払われて転んでいた。

「痛つて〜、このガキ〜！！！！」

足を払われた男は、そう言って再びレモンを襲おうとするがレモンを襲わなかった三人組の中で一番偉そうな男に「待て」と言われて動くのを止めた。その男は、サヤカを無理矢理抱え込んでいた。

「言うことを聞いてくれないとこの子は、もう学校に通えなくなっちゃうんだけどな」

「・・・・・・・・・・」

レモンは、悔しそうな顔で男たちとサヤカと一緒に今は、誰も使っ
ておらず相当大きな声を出しても誰にも聞こえない町はずれのつづ
れた工場に行った。

「……ここまで来たんだからサヤカちゃんを離しなさいよ!」

「お前さんが裸になったら良いよ」

レモンの言葉にサヤカを抱えている男（以後リーダー）にそう言わ
れてレモンは、困った顔をしてサヤカは、必死に叫ぼうとした（口
を押えられているため喋れない）。

「……………良いわ。恥ずかしいからあっちで脱いでくる……………」

「おっと、お兄ちゃんも手伝ってあげよう」

そう言いながらレモンと一緒に先ほどからレモンたちを襲う気満々
の男（以後ロリコン）がその場を離れる。

「よ〜し、さっそくぬぐエ!？」

ロリコンは、さっそくレモンの服に手をかけたがレモンに腹を殴られた後顔を蹴られて撃沈した。

「さて……ここからだわ……」

レモンは、そう言う残り二人にばれないように足音を立てずに「作業」をした。

「……………お待たせ」

レモンは、倒れたロリコンの服を上に来て服を脱いだのか脱いでいないのかわからない格好で二人の前に来た。

「おい、あいつは、どうした?」

「トイレに行ったわ……」

リーダーの質問に軽く嘘をつく。

「じゃあ、なんであいつの服を着ている?」

「だって……裸は、恥ずかしいんだもん／＼／＼／＼／＼／」

わざと恥ずかしがりながらそう言うレモンにリーダーじゃない男は、レモンに近づく。

「じゃあ……始めようか？」

「3……2……1……」

近づく男は、無視してレモンは、数を数え始める。

「0!」

レモンの言葉と同時に工場にぎやかな音楽が流れた。

「うお！何だこれは？」

驚くリーダーを無視してレモンは、リーダーの腹を思いつきり蹴りサヤカを救った後ヨーヨーでリーダーを倒した。

「これは、携帯のアラームよ 大丈夫？サヤカちゃん!」

「うん……平気。ありがとう、レモンちゃん」

サヤカの無事を確認するとレモンは、先ほどロリコンを倒した場所でスマートフォンを回収して電話に出る

「もしもし、マママ?」

『レモン・・・大丈夫?』

「うん、もうすぐに終わるよ」

レモンがそう電話すると男が背後から殴りかかってきたがレモンは、電話しながらバック転をしながら男の頭を蹴った。

「前言撤回・・・もう終わったわ」

『そ。じゃあ、気を付けて帰りなさい』

「はい、ママ」

そう言って、レモンは、電話を切ってリーダーに再び「細工」をする。

「このガキ〜!」

男は、怒ってレモンを追うがレモンは、逃げていた。

「サヤカちゃんは、そこで待っててね」

「え!?!レモンちゃん?」

そう言うレモンは、工場にあった大きな取っ手をつかむ。

「お?観念したか?じゃあ、楽しいことでも始めようか?」

男は、そう言いながら左手でレモンの攻撃に備えながらレモンに近づく。

「別に良いけど・・・ちゃんと後ろも見ないとね」

「はん！誰が騙されるものぐわああ！！」

男は、レモンの忠告を無視してレモンに近づこうとしたが背中に強烈な衝撃があつてレモンにそのまま突進したがレモンは、かわして男は、後ろと前の両方に強烈な痛みを感じて気絶した。男にぶつかったのは、リーダーだった。

そして、レモンは、リーダーから先ほど着けたヨーヨーを回収する。レモンは、本当は、逃げたのでは、なく。リーダーを引き寄せるのには、自分では、軽すぎるため支えを探していただけだった。

スパイヨーヨーは、高いところに引っ掛ければそこに上がれるほど優れたヨーヨーなのでそれを利用してリーダーをこちらに引き寄せたのだった。

「ミッション・・・クリア」

そう言ってレモンは、サヤカのところに行き

「帰ろう、サヤカちゃん」

「うん……！」

レモンの言葉に元気に頷くサヤカだった。

第9話 レモンの友情奮闘記（後書き）

スパイヨーヨーでこんなことができるかは、少し疑問ですが・・・まあ、できるということ。レモンほどだったら嫉妬キャラがいても良いかな〜と思ひまして

アカネ

「レモンちゃんがいなければ私がクラスのアイドルですよ!!」

レモン

「（アカネちゃんどうしたんだろ？）」

話は、まだまだ募集中です。良ければどうぞ言ってください

第10話 将来浮気する確率120% (前書き)

題名に深い意味は、ありませんね。しんちゃんって映画の終盤になるとものすごくかっこよくなるのに普段は……ですからね。今回もニコさんの要望です。

第10話 将来浮気する確率120%

「えっ!？パパとママ明日お休みとれるの?」

ある日の土曜日の夜仕事でなかなか家に帰ってこなかった両親から言われた一言でレモンは、驚きの声を上げていた。

「ああ、やっと一段落ついてね。明日は、久しぶりに家族でどこかに行こうか?」

プラムは、自分の娘の感情表現が昔に比べて豊かになったことを内心喜びながら提案する。

「どこか行きたいところある?」

「え〜とねううん、やっぱりないよ」

「レモン」

ライムの質問に最初明らかに自分の行きたい場所を言おうとしたレモンだったがすぐに何か考えて遠慮してしまった。

色々なことがあってレモンと両親の距離も縮まったのは、事実だがやはりレモンは、いまだに両親に自分の意見を言うことにためらいを感じていた。だから、我儘なんてものは、全くしない。

「奥様、少しお時間よろしいでしょうか?」

親子三人で話をしていると両親が仕事で留守にしている時にレモンの世話をしてくれている家政婦のイツハラがライムを呼んでいた。

ライムは、一度レモンの方を見た後にイツハラを追って廊下に出る。

「なにかしら？イツハラさん」

「お嬢様が最近テレビで海の様子を熱心に見ていますよ」

「海？」

ライムは、そう言った後考えた。

そういえば・・・記憶にある限りあの子と一緒に海に行った記憶がなかった。

明日からも仕事がある為こんなチャンスが次いつあるのかも未定である。

あの子は、自分たちに遠慮してしまっている・・・この事實は、正直母親としては、きついがそういう風に育てたのもまた自分だ。ならば・・・やることは一つだろう。

「ありがとうイツハラさん」

「どづいたしまして」

ライムは、そう言うと部屋に戻り一言こつ言い放った。

「明日は、海に行きましょう!!」

ライムがそう言い放った時レモンがひそかにうれしそうなお表情をしたことをライムは、見逃さなかった。

そして、日曜日。

「わゝ、海だあゝゝゝ!!」

レモンは、ひそかに行きたかった海に来て喜びを隠せなかった。しかも喜ぶ要素は、まだあるのだ。

「で………でかい………」

しんのすけは、驚愕の表情で「それ」を見ていた。今回は、ライムがレモンを喜ぶだろうと思ったのとなんだかんだでお世話になっているので野原家を誘ったところOKが来たのだ。

因みにしんのすけは、現在「水着姿のみさえのおしり」を見て驚愕の表情をしていた。

ゴッソーン！！

数秒後には、しんのすけの頭にたんこぶができていた。

「余計なお世話よ！！！」

「ううう、母ちゃんの暴走ケツデカおばば！！！」

しんのすけがそう言った瞬間みさえの第二撃があったがそれをかわしてしんのすけは、レモンのところに行った。

「あ、コラ待ちなさい！！！」

みさえは、怒鳴るが追いかけなかった。ここには、スノモノ家がいるためあまり見苦しい場面は、見せたくないのだ。

「レモンちゃん」

「しんちゃん」

しんのすけは、レモンの方を走り（しんのすけの水着は、赤い海パンでレモンは、スクール水着）……レモンを素通りした。

「あれ？」

我ながら間抜けな声を出してしまったと思いつつ、後ろを見ると……。

「お姉さま、かき氷には、何かけるタイプ？イチゴ？メロン？
オラは、レモンだゾ！！」

「ちよっ！？何この子！一応私は……練乳だけど
ナンパしていた。」

「~~~~！？ほら、しんちゃん。泳ごう！！行くよ」

「え、あ、お姉さま」

レモンは、しんのすけの手をつかんで海の方に向かった。

顔が熱いのは、きつと気温が高いからだ。決してしんちゃんがかき氷でレモンをかけると聞いたのとは、関係ない。と思いつつ……。

「全くしんちゃんって将来浮気するタイプでしょ？」

「え、そうかな。そんなに褒めないでよ」

「いや・・・褒めていないから」

レモンとしんのすけは、浮き輪でプカプカ浮きながらお話していた。因みに父親組は、何のために来たのかわからないが二人でビールを飲んでのんびりしており母親組は、サンオイルを塗っていた。

「いや、今日は、誘ってくれてありがとうございます」

「いやいや、こちらこそですよ。子供たちも何だかんだで楽しそうにしていますね。これからもよろしく願いますよ」

「こちらこそ！じゃあ・・・」

「乾杯！」

父親組は、片手にビールを持ちながら楽しそうに談笑していた。・・・自分たちが車を運転してここに来たことを忘れて。

「でも、レモンちゃん良い子ですよ。本当に羨ましいですよ」

「……私たちとしては、もう少し我儘を言ってもらいたいですよね。それにしんのすけ君も良い子だと思いますよ。あの子がいたからレモンは、自分のやりたいことをやって私たちも間違いに気付けた。……本当に感謝しています」

「そ……そんな、お礼なんて良いですよ。それに……しんのすけがきっかけとはいえ間違いに気付いたのは、他ならぬあなたたち自身なんですから……それに、しんのすけもレモンちゃんに会えて本当に喜んでるんですよ」

「はい……そうですね。これからもあの子共々よろしく願います」

「いちらじそ」

母親組は、サンオイルを塗り終えた後何やら真剣な話をした後世間話で盛り上がった。

「そ……そういえば……しんちゃんってかき氷にレモンをかけるんだね？／＼／＼／＼／＼」

レモンは、これでもかというぐらいに恥ずかしがりながら質問した。

「そうだゾ。前は、イチゴだったんだけど……レモンちゃんと別れてからレモンちゃんのことを忘れなくて暑いときは、レモン

飽きてきちゃった。しんちゃん沖まで競争しよ」

レモンは、しんのすけの純粹アホさに若干驚いた後そろそろ泳ぎたくなってきたのでそう言う。

「良いゾ〜。浮き輪どうするの?」

「ああ……。パパたちが頭を冷やす際に取ってきてもらおうかな」

レモンは、浮き輪をどうするか考えたが浜辺でいまだにビールを飲んでいる父親組を見てすぐに取ってきてもらうことにした。

「じゃあ……スタート!」

「うう〜、レモンちゃん速すぎるゾ」

「」

まあ……結果は、レモンの圧勝だった。しんのすけは、何故か後ろ向きで泳いでいたが……。

「ああ・・・お帰りなさいレモン」

「ただいま。ママ」

「浮き輪は、どうしたの？」

「あれは・・・パパたちを取ってきてもらおうかと・・・」

レモンのその言葉で言おうとしていることが分かったライムとみさえは・・・

「「そういえば、あなたたちが車運転するんだっ！！！！！！！頭冷やしてきなさい！！！！」」

「「あ~~~~~~~~。しまったあああああああ！！！！」」

父親組は、慌てて浮き輪を取りに行きついでに泳ぎ始めた。

「私たちも泳ぎましょうか？」

「そうですね」

母親組も泳ぎ始める。

「私たちも行こっか？」

「うん・・・あ、一つ言い忘れたぞ」

「どうしたの？」

「うん」

車の中では、レモンが今日のことを思い出すたびに嬉しそうだった。

第11話 レモンの誕生日(前書き)

今回は、レモンの誕生日!!しんちゃんは、永遠の五歳児だけどね
(笑)。

今回もニコさんの要望です。

第11話 レモンの誕生日

レモンは、今少しだけ悩んでいた……。

「言おうかな……でも、なんだか図々しいよね」

今日は、レモンの誕生日のだが昔から誕生日でもあまり祝ってもらっていない。両親は、このチャンスにレモンの為のプレゼントを買おうとしたらしいが仕事が遅く帰るのは、明日らしい……。そして、現在しんのすけたちと鬼ごっこをしているのだ。言えばそれこそ祝ってくれるのだろうがなんだか遠慮してしまいそのまま今日になってしまった。

「はい、レモンちゃんタッチだゾ」

「キャ!?!びっくりした〜。じゃあ、早く捕まえちゃお」

結局レモンは、みんなに遠慮してしまうのと

「（今更言っても遅いよね?）」

という事で自身の誕生日を気にしないことにして鬼ごっこを再開した。

「ごめん……今日僕用あるんだ……」

「私も」

「ぼー」

「じゃあ……解散だね」

いつもより早い時間しんのすけとレモン以外の四人は、用があると
言って帰ってしまった……。

「あつ、そういえば母ちゃんと出かけるんだった!!」

しんのすけもそう言って家に帰る。

「何だ。結局言っただとしても……みんな用があるに決まってる
よね イツハラさんは、今年もケーキを用意してくれているのかな
?」

レモンは、少し自嘲気味に笑った後自宅に帰ろうとするが突然電話
が鳴る。

「……ママ?」

『レモン、仕事をお願いするわ』

相手は、ライム。そして、内容は、スパイとしての仕事。日本に来てからは、昔に比べてかなりその量は、減ったが一応スパイとしての仕事もレモンは、していた。

レモンは、自身の誕生日の母親からの要件が仕事だと知り少しだけ落ち込んだがそれをライムにはれないないように

「分かったわママ。内容は？」

いつも通りに喋った。

『内容は、そこから離れた場所でダブルマンが脱走したからそれを速やかに確保してイツハラさんに渡して』

「・・・了解」

任務の内容としては、簡単だ。だけど・・・油断しちゃいけない。そして、レモンは、ダブルマン探しを始めた。

『・・・了解』

「ふう〜〜〜〜〜」

レモンとの通話を終えたライムは、一息ついてコーヒーを飲んで
いた。

「さて、あの子の仕事が終わるまでにこちらの仕事を終わらせるわ
よー!」

「ココココココココお〜〜〜〜〜〜!」

ライムの言葉に反応したのは、今日は、もう帰ったはずの春日部防
衛隊とプラムだった。

そう言って彼らは、着々とスノモノ家のリビングを飾りつけしてい
く。一人の少女の誕生日を祝うために。

「はあはあ……待ちなさい!!」

レモンは、何とかドーベルマンを見つけることができたが犬の運動能力は、人間をはるかに超えておりましては、ドーベルマンを一人で捕まえるのは、意外と大変だった。

「……………イツハラさん。車をまわして!」

『かしこまりました』

そう言うつとすぐに走っているレモンとドーベルマンの横に車がくる。

「……………ごめんね」

レモンは、静かに謝ると用意していた麻醉銃を使ってドーベルマンを眠らせてイツハラと一緒に車に乗せた。

「ミッション……クリア」

レモンは、一息つくつとライムに電話を掛ける。

「ママ?ミッションをクリアしたよ」

『そう。じゃあ、ドーベルマンは、イツハラさんに渡して貴方は、歩いてきなさい』

「分かった」

この場所から自宅までは、少し距離があったがレモンは、車を降りるととぼとぼと歩き始めた。

「ただいま」

「……………」誕生日おめでとうレモン（ちゃん）！

「……………」

「……………え!？」

レモンは、驚いていた。何故なら家には、誰もいないはずだからである。だが……クラッカーの音と同時に聞こえた声は、両親や友人たちの声だった。そして、それを証明するかのように目の前にみんながいる。

「え……………パパとママの仕事は？しんちゃんたちは、用があった

んでしょ？イツハラさんもドーベルマン」

レモンは、混乱しながら聞いていたがみんなは、くすくす笑いながら……

「仕事は、根性で終わらせたよ。仕事よりも娘の方が大切だからね」

「僕らの用は、今日ここでレモンさんの誕生日を祝うことですから」

「オラも母ちゃんと出かけ終わったゾ」

「車でしたのでさっさと終わらせました」

プラムと風間としんのすけとイツハラがそう言つとレモンは、目を見開いて驚いていた……。

「あなたの誕生日は、私が教えたのよ。友達と一緒に祝ってもらいたいでしょ？」

「ありがとう……ママ」

ライムの言葉にレモンは、思わず涙が流れたが笑顔でお礼を言った。

「さあ~~~~~、ケーキを食べよう！レモンふうして」

「ふう~~~~」

プラムに言われてレモンは、ケーキのロウソクに息を吹きかけてロウソクの火は、すべて消える。

「誕生日おめでとう~~~~~」

「ありがとう」

そして、みんなでケーキを食べ始める。

「はいレモンさんこれ」

「はい」

「どうぞ」

「ぼー」

「四人ともありがとう」

ケーキも食べ終わり四人がレモンに誕生日プレゼントを渡した。内容
容は

風間 高級そうなハンカチ

ネネ ウサギのぬいぐるみ

マサオ かなり価値がある(らしい)テレホンカード

ボーちゃん 綺麗な丸い石

「私たちからは、これよ」

ライムが渡したのは綺麗なペンダントだった。

「いつでもおしゃれに目覚めても大丈夫なようにな」

レモンは、物凄く恥ずかしがっていた。

こうして、スパイ少女にとっての最高の誕生日は、過ぎて行った・・・。

第11話 レモンの誕生日（後書き）

レモン

「こんなにプレゼントもらっちゃった」

テレホンカードと石が誕生日プレゼントとは……………。

レモン

「気持ちが大変なの!!!」

左様ですか……………。

レモン

「お話は、まだ募集しています」

第12話 レモンの少年救出劇(前書き)

レモン

「さて、題名の意味を簡潔に説明して」

カオス

「空が青いなあ〜〜〜」

レモン

「ごまかすな!」

今回もニコさんの要望です

第12話 レモンの少年救出劇

野原家とスノモノ家は、現在キャンピングカーに乗っていた。

「いや〜、キャンプとは、また心が躍りますな〜」

「ええ、しかも今回は、運転のことなんか気にしなくても良いですからね〜」

ひろしとプラムは、そんなことを話しながら軽く飲んでいた。
今回運転手は、イツハラさんなので「安心して飲める」とのことらしい。。。

「キャンプ楽しみだね しんちゃん」

「水着のお姉さんいるかな〜」

「いや・・・さすがにいないと思うよ」

しんのすけの言葉に若干呆れ気味にレモンが言っていると・・・。

「到着しましたよ〜」

今日キャンプする場所についた。

「ふう、日々都会で仕事している俺には、この自然が眩しいぜ」
ひろしは、最初に車から降りてそんなことを言っていたが……。

「そうですね……仕事で東京とか言ってるんでやはり自然も良いですね」

「そ……そうですね……」

プラムの言葉でひろしの言葉から説得力が消えていた。

「東京と埼玉じゃ都会のスコールが違うゾ」

「スケールね」

「うるせえよ!!」

しんのすけの言葉にレモンが突っ込みひろしは、怒っていたが……。

「し……ごめんなさい」

「い……いや、レモンちゃんを怒ったわけじゃないよ。しんのすけに正しい言葉を教えてただけだもんね。おじさんが怒ったのは、あくまで……」
「男らしくないゾ。父ちゃん！」
頼むから黙っててくれ!!」

自分が怒られたと思ってレモンは、謝っていたがそれがきっかけて

一人は、必死に謝り一人は、必死に弁解して一人は、適当に邪魔をするというなかなか面白い構図ができていた。

「あゝ、お肉を買い忘れました。わたくし買ってきます」

イツハラがそう言うとキャンピングカーで山を下って行き……。

「まあまあ、野原さん一杯やりましょうよ 大自然の中で飲むのも風流ですよ」

「そうですね。飲みますか!?!」

二人は、運転手という束縛を逃れたのでリミッターを解除していた。

「……さすがに飲みすぎね」

「……いい加減に하십시오」

しかし、静かに怒りを燃やした母親組は、父親組の首根っこを掴んで子供たちに見せないために（主にレモンに見せないために）森の奥の方に連行した。

「あ……あの……みさえさん!?!……こここれは、どういう冗談でしょうか?」

「ラ……ライム?今日は……ほら……仕事も休みだし……な?」

「あら、冗談っていいことの良いわよ」

「知ってる？飲みすぎは、体に毒よ」

「しんのすけ／＼レモン」

「うるさい！！」

父親組は、最後に最愛の子供たちの名を呼んだが残念ながら聞こえず連れて行かれた。

因みにひまわりは、張ったテントで寝ている。

「お！？魚がいるゾ」

「気を付けてしんちゃん！川滑るよ？」

「だいじょぶだいじょぶ！？」

レモンの言葉を聞き流しながら魚を手づかみしようとしたしんのすけだったが川の流れが予想よりもはるかに急でしんのすけは、足を滑らせて流れて行った。。。

「うおわああああおわああ！！！！」

相当驚いたのであろう意味不明な叫びを残してしんのすけは、流れていく。

「た・・・大変！この先には、滝が・・・ママたち呼んでいる時間、無いね・・・」

レモンは、決心すると木の枝を渡り歩いてしんのすけよりも先に行く。

そして、スパイヨーヨーを枝に引っ掛けて自身を下につるす。

「しんちゃんつかまって!!」

「ぶくぶくぶく・・・デボンちゃん!!」

しんのすけは、必死にレモンの手をつかんだが川の流れに負けて離してしまった。

そして、しんのすけは、滝壺に落下する。

「しんちゃん!?!」

「レモンちゃん!!」

レモンは、滝の近くで最も太い枝にヨーヨーを引っ掛けると飛び込みのように飛び込んだ。

「しんちゃん!!」

「.....」

レモンは、叫ぶがしんのすけは、すでに気絶していた。

「っ!?!.....やばい、まだ届かない!!はあ!!」

レモンは、必死に手を伸ばしてやっとしんのすけの服をつかむ。そして、しんのすけを抱えてヨーヨーを操作して上に上がった。

「とりあえず気をつけなさい！」

「あなたもよ」

「はぐい！ってどうしたんだお前等！」

大人四人が戻ると一人は、しんのすけは、びしょびしょに濡れて気絶してレモンは、少し濡れた状態で仰向けに深呼吸していた。

「はあ……はあ……ミッションコンプリート！」

「全く今度から気をつけなさい!!」

「ごめんなさい」

「ごめんね、ありがとうねレモンちゃん」

「いいえ。無事でよかったです」

「本当に無事でよかったですわ」

事情を聴いたみさえとライムは、バーベキューの用意を父親組とイッハラさんに任せてしんのすけを叱りレモンを褒めるのと同時に無茶したことを少し叱っていた。

「おい、用意できたぞ」

「じゃあ、この話は、終わりにして食べましょうか?」

「お~~~~~!!」

そして、二人は、三人の待つ食事場に行った（しんのすけとみさえは、しんのすけの着替えに一度車に行った後向かった）。

「おい、しんのすけ！！肉ばかりじゃなくて野菜も食べえ！」

「うーん、うまいぞ」

「そうよ、ちゃんと野菜も食べないとぶくぶく太るわよ」

「じゃあ、まず母ちゃんは、手遅れだね」

「なんですってえ~~~~~!!!!」

しんのすけの言葉で怒りが爆発したみさえは、しんのすけに拳骨をお見舞いしようとしたがしんのすけは、かわしてプラムと一緒に食事しているレモンに飛びつく。

「うわっと!?!?しんちゃん何?」

レモンは、危うく落としそうになった皿をテーブルに置いた後しんのすけに聞くと。

「怪獣ミサエゴンがもうすぐ来るぞ春日部防衛隊ファイアー——
——！」

「……え〜と、どうすれば？」

しんのすけの意味不明なテンションについていけないレモンは、困惑するがその間にみさえは、しんのすけに追いつき一発殴ろうとしたがレモンとプラムが見ていることに気づき……「まったく、覚えてるよ！」と捨て台詞を言っつて再び食事に戻った。

「みんな〜、食事が終わったら帰りましょう」

先ほどまでイツハラさんと何やら話していたライムが突然そう言う。

「あれ？ママ。確かキャンプって泊まるものじゃないの？」

「残念ながら雨が降りそうよ。泊まったら……しんのすけくん以上濡れることになるわね」

「じゃあ……しょうがないね」

レモンは、少し残念そうな顔をしたがすぐに笑顔に戻ってしんのすけ達の方に行つて先ほどの話をしながら食事を再開する。

「そうか……それは、残念だな」

「本当ね・・・」

「うんうん、大変だゾ」

一人明らかに分かっている奴がいるがレモンは、軽くスルーした。

「あ・・・雨が降ってきた」

食事も終わり荷物を片づけて車に乗って移動しているとぽつぽつと雨が降り出す。

「帰って正解だったわね」

「まあ・・・今度また来れば良いさ」

「おっ！野原さん今日の分飲んじゃいますか？」

「良いですね」

そうやって二人は、再び飲み始める。

「ふう・・・私もたまには、飲むか？」

「全く言っても聞かないわね」

母親組も父親組の小さな飲み会に参加して酒を飲み始める。

「・・・・・・・・ZZZZZZZZ」

そんななか疲れた子供二人は、お互いに寄り添う形で眠っていた。。。

第12話 レモンの少年救出劇（後書き）

しんのすけ

「オラもお酒飲む〜!!」

レモン

「この国は、20歳にならないとダメでしょ？」

カオス

「いや・・・別に良くね？」

レモン

「ダメです!」

ひろし

「ご要望お待ちしております。酒うめええええええええ!!」

第13話 嵐を呼ぶパーティー（前書き）

今回はダディさんとデネブキャンディーさんの要望です。

デネブキャンディーさんの作品から『野原しんのすけ』が来ます。

まあ、彼の活躍は次回になるんですが……。

第13話 嵐を呼ぶパーティー

「しん様！今日はあいの家でパーティーをやるのでお友達も一緒に来てください？」

「おおー、いくゾ」

幼稚園の休み時間密かに……ではないがしんのすけに恋する女の子酢乙女あいは風間たちと遊んでいたしんのすけにそう言った。

勿論しんのすけは行くと言ってほかのみんなも楽しみにしていた。

「では、お待ちしておりますわ」

『じじい……どじだ？』

その頃、酢乙女家の近くで灰色のオーロラが現れてそこからジャガイモ頭の子供が出てきた。

『春日部？』

子供は持っていたカメラで写真を撮った後『オラの世界じゃないな・・・』とつぶやきながら歩いて行った。

それから数時間後・・・学校を終えたレモンが家でテレビを見ているとインターホンが鳴らされたので「はーい」と言いながらドアを開けると・・・。

「パーティに行くぞ!!レモンちゃん!!」

「さあさあ、早く準備して!!」

「うわあ、楽しみだな」

「珍しい石があるかも・・・」

「ふん!せっかく誘ってもらったんだからそれなりに楽しんでやるわよ!」

「はい……?」

かなり興奮している五人の五歳児がたちがいた。

「ゴメン……説明をお願いします」

そして、説明を受けたレモンもパーティーに参加することにした。

「おいしいおいしい」

「しんちゃんこれもおいしいよ!」

しんのすけとマサオはパーティーの会場に来るなりそこにあつた食べ物を食べ始めた。

因みに風間は近くにいたアメリカ人と話をしてボーちゃんは石さがしネネは近くにあるカラオケコーナーで歌っていた。

そして、レモンは……。

「しんちゃん口に物を入れすぎると飲み込めなくなるよ!」

しんのすけたちと一緒にジュースやデザートを食べていた。
因みにレモンは一度周りを散策してから食べ始めたのでしんのすけ
たちと違いさつき食べ始めた。

「しん様！？きてくださったのですね？」

「「「ん？」「」」

三人が食事をしていると今回の主催者であるあいがしんのすけの姿
を発見してこちらに向かってきていた。

「あら？そちらは？」

「はじめまして！スノモノレモンといいます。今回はしんちゃんた
ちのお友達という関係でパーティーに参加させてもらうことになりま
した」

レモンはすぐに目の前の少女が今回のパーティーの主催者であると気
付いてお辞儀をしながら挨拶をしていた。

因みに何故気づいたかというと・・・入口に大きくあいの写真と
ともに「あいお嬢様の身長がー？伸びました記念パーティー会場」と
看板があったからである。

因みに主催理由は突っ込まなかった。

思わず突っ込もうとしたらネネが「あいだもんね・・・」と言っ
ていたからである。

「あら、ご丁寧にどうも 私は酔乙女あいといいます。よろしくお
願いますね！レモンさん」

「「「ちらちら」」

自己紹介を終えた二人は軽く握手して一緒にケーキバイキングでケーキを食べ始めた。

「あゝ！あいここにいたの？一緒に歌いましょうよ！！」

あいの姿を確認したネネは一度カラオケを中断してケーキバイキングの方に来た。

「あら？じゃあ、レモンさんも入れて三人で歌いませよ！！」

「ええ………ってええ！？」

あいの言葉に軽くうなずいたレモンだったがいつの間にか自分も歌うことになっていることに遅れて気づき驚いていた。

レモンは断ろうとしたがさっさとやってしまう二人をみて「しょうがないな……」とつぶやきながら二人を追いかけた。

若干嬉しそうなのはレモンだけの秘密らしい……。

「あれ、レモンさん上手いですわね」

「ありがとう カラオケなんて初めてだから自信なかったんだけど良かった」

「二人とも13曲目行くわよ！！」

「「まだ歌うの!?!」」

ネネの何かに火がついてしまい二人がうんざりしながらマイクを持ち直していると近くにいたひげが長いおじいさんからいきなり砂が流れ出してその砂が怪人の形になった。

「さ〜て、過去を変えちまうぜ〜!?!」

突然現れたひげの長い怪人は自分のひげを伸ばして近くにいた招待客を掴んで投げ飛ばし気絶させた。

「危ない!?!」

その怪人・・・まあ、ヒゲイマジンのひげが先ほどまで歌おうとしていたレモンたちの方に伸びてきたのでレモンはスパイヨーヨーを使ってひげを叩き落としていた。

「お嬢様〜!ご無事ですか?」

「黒磯!急いであの化け物を何とかしなさい!?!」

「かしこまりました。S P 出動!?!」

あいの命令でS Pが総動員してヒゲイマジンに立ち向かっていきその間にレモンたちと招待客は非難した。

「もぐもぐ・・・どうしたんだろ？」

お菓子コーナーにあったチョコビを食べるのに夢中になっていたしんのすけは気づいたらみんな慌てているのに気付いた。

『化け物が現れた君も早く非難した方が良いゾ・・・ってオラ！？』

「ん？ウオオオオオオ！！？オラがいるゾ！？」

そんなしんのすけに状況を説明してくれた人がいたが二人ともお互いの顔を見た瞬間驚いていた。

二人とも同じ顔をしていたから・・・。

「なんでオラがここにいるの？」

『なるほど・・・きみは別世界のオラか・・・とりあえず早く逃げた方が良いゾ！』

しんのすけはしんのすけの言葉を無視するとイマジンの方に走って行った。

「あつ！？オラも行くぞ〜！」

「しんちゃん！？」

レモンは怪人の方向に向かっていくしんのすけを見たので追いかけてようとしたが人ごみに押されてそれは叶わなかった。

「さうと、そろそろこの時間を改変するか？」

『そうはいかないゾ！変身！！』

人がいなくなり退屈したヒゲイマジンは移動しようとしたがそこにこの世界のしんのすけじゃないしんのすけが駆けつけた。

しんのすけはカメラのようなベルトを腰に巻きつけてカードをベルトに入れる。

【KAMEN - RIDE】

【DECADE!!】

そんな電子音声とともにベルトから9つのビジョンと7枚のカード状のものが現れてそれはしんのすけに重なりしんのすけの姿は変わって同時に背が成人男性ぐらいの大きさになった。

しんのすけの変身した「仮面ライダーディケイド」は腰についているライドブッカーと呼ばれる本のような形をしたものを剣の形にしてヒゲイマジンに向かっていった。

「オラが変身したゾ・・・」

その光景をしんのすけは呆然と見ていた・・・。

第13話 嵐を呼ぶパーティー（後書き）

次回に続きます。次回はしんちゃんがまた・・・。

第14話 二人の仮面ライダー（前書き）

今回は前回の続き。

デネブキャンディーさんありがとうございました。

第14話 二人の仮面ライダー

突然現れた異世界のしんのすけ……仮面ライダーディケイドはライドブッカードをソードモードにしてヒゲイマジンを斬っていた。

「ぎゃあああ!!お前電王!?!……じゃないな?何者だ?」

『通りすがりの仮面ライダーだゾ!覚えておけ!』

ディケイドはそう言うとライドブッカードをガンモードにしてヒゲイマジン撃つがヒゲイマジンはそのヒゲを伸ばして銃弾を全て防いだ。

「くらえくらえ!!」

ヒゲイマジンはそのくらへんにあった食べ物や土壇場で招待客が落としたであろう物を片っ端からヒゲで掴んで投げていた。

『何だか地味に痛いしやだゾ……』

相手がケーキやジュースや肉などの食べ物も投げってくるため地味に痛いうえに精神的にダメージを負うディケイドだった……。

ディケイドはライドブッカードをソードモードにしてヒゲイマジン斬ってやめさせようとすると突然動きを止めた。

「ふふふふふ……これでもくらえ!!!!」

ヒゲイマジンが掴んでいるものは……酔乙女あいの姿をした巨大な銅像だった……。

トラックを縦にしたような大きさにデイケイドは流石に動きを止めているとヒゲイマジンはすかさず投げてきた。

『ちちちちよつとでかいでしょ!?!』

何とか銅像をかわしたデイケイドだったがヒゲイマジンはそこら辺にある『でかくて痛そうなもの』をどんどん投げてきた。

「ひやははは!! 武器がたくさんあるぜ」

『ぐっ……』

それらをかわしたり斬ったりしたデイケイドだったがどっから持ってきたのか本物のトラックを投げつけられて踏みつぶされてしまった……。

因みにトラックは無人だった。

「ひやはははは!! このままぺちゃんこにしてやるぜ!」

「危ない! お助けするゾ!」

トラックの上に先ほどまで投げていた多くの物を再び投げようとす
るヒゲイマジンにしんのすけは跳びかかっていた。

だが、ヒゲイマジンは「邪魔だ」と言いながらしんのすけを軽く蹴
る。

『オラが危ない!?!』

デイケイドはトラックから脱出するとライドブッカーをガンモード
にしてヒゲイマジンを撃つ。

「ちっ……もう出てきやがった」

ディケイドはひげイマジンを撃ちながらヒゲイマジンとしんのすけのところへ近寄ってヒゲイマジンを蹴り飛ばす。

『大丈夫？危ないからここは離れた方が良いゾ』

「オラも戦う！！」

ディケイドがしんのすけを逃がそうとするとしんのすけは逆にヒゲイマジンに再び跳びかかるうとした。

その表情は真剣だった……。

『君は戦う力を持っていないから早く逃げろ！』

「今回のパーティーでみんな笑っていたゾ……風間君もネネちゃんもぼーちゃんもおにぎり君もレモンちゃんもあいちゃんも……それにこのままだとあいちゃんのお家が壊れちゃうゾー！」

しんのすけはディケイドにそう叫んだ。

今のしんのすけは必至だった。

マサオ君の名前を間違えるほどに……まあ、いつも間違えてるけど。

すると、ディケイドのライドブッカーから一枚のカードが飛び出してくる。

『これって……』

ディケイドはそのカードを見てドライバーにカードを装填する。

【KAMEN - RIDER】

【SHIN - O!】

すると、デイケイドの体はしん王に……ならなかった。

『はっ?……ってええええええ!?!』

一瞬驚き隣にいるはずのしんのすけの姿を見るとデイケイドは絶叫した。

しんのすけはしん王に変身していた……。

「おお〜 変身できたゾ〜」

『あれ?確か……カメンライドってさ……』

デイケイドは一瞬困惑したがすぐに考えるのをやめた。

『……まあ、良いか?』

デイケイドはそう言うと言つとライドブッカーでヒゲイマジンを斬ろうとするが……ヒゲイマジンはそのヒゲで今まで投げた物すべて回収して投げようとしていた。

「オラが止めるゾ!」

しん王はそう言うと言つとベルトのバックル部分である鼻を自身の鼻に装着すると鼻水を飛ばした。

鼻水はヒゲにくっつきしん王とヒゲイマジンは鼻水とヒゲで力勝負していた。

「今だゾ！」

『!?!? ああ・・・分かった!』

目の前で繰り広げられている熱い? 戦いに呆然としていたディケイドはしん王の言葉で正気にかえるとカードを装填する。

【FINAL - ATTACK - RIDE】

【D - D - D - DECAD E!】

電子音声と共にディケイドと必死にヒゲを動かしているヒゲイマジンの間に十枚のカード型エネルギーが現れる。

ディケイドはジャンプした後に現れたカード型エネルギーを潜ってヒゲイマジンにとび蹴りした。

「ぐわあああああ!!?!? 小僧! 俺のヒゲはお前の鼻水に負けていないぞ~~~~!!?!?」

ヒゲイマジンは訳の分からないことを言って消滅した・・・。
そして、二人も変身を解く。
すると、灰色のオーロラが出現した。

『成程・・・オラがこの世界に来たのはあのイマジンを倒すためだったのか・・・』

「っていつか何でオラがいるの? まさか・・・」

しんのすけはそう言って異世界のしんのすけの方を見る。

異世界のしんのすけもじつとその瞳を見ていた・・・。

「まさか……オラ？」

『まあ……オラはオラだけだね……』

異世界のしんのすけはしんのすけの言葉に若干呆れながらも返事する。

すると、遠くからレモンの声が聞こえた。

「しんちゃ〜ん！どこにいるの〜ん！？」

『そろそろ、行くゾ』

異世界のしんのすけがオーロラを潜ろうとするとしんのすけは「また……会える？」と聞く。

異世界のしんのすけはその言葉で軽く笑ったあとしんのすけの方を見た。

『会えるも何もオラはオラだゾ』

「そうか」

その言葉を最後に異世界のしんのすけは去って行った……。そして、それと入れ替わりにレモンが走ってくる。

「いた！！あれ？あの怪人はどこに行ったの？」

「オラとオラが倒したゾ」

レモンはしんのすけの言葉に首をかしげていたがとりあえずしんの

すけの無事を確認したので良いということにした。

その後・・・パーティは中止になり酔乙女の使用人は戦いの後か
たずけや謎の怪人探して当分忙しかったという・・・。

「本当！良い迷惑ですわ！！」

次の日の幼稚園でのあいの機嫌が悪い様子にはみんな苦笑いするし
かなかったという・・・。

第14話 二人の仮面ライダー（後書き）

レモンの出番が少ないのは許してください!!

本当は活躍させたかったんですが……まあ、今回はしんちやんがメインと言うことで。

第15話 スパイとお姉さんと夏祭り(前書き)

今回はあの人が登場。

今回はニコさんの要望です。

第15話 スパイとお姉さんと夏祭り

ある土曜日、レモンはしんのすけの家で遊んでいた。

「じゃあ、私はここをとりますね」

「うそ〜!〜!」

まあ、実際はしんのすけはアクション仮面を見てレモンはみさえとオセロをしているのだが。

因みに現在レモンの三戦三勝である。

みさえの完全敗北が決まり始めたころ突然インターホンが鳴った。

「しんのすけ、ちょっと出てよ」

みさえは何とか勝つために集中しようとしている。

いくらスパイとはいえ八歳にオセロで負けてばかりるといっても結構傷つくのである。

「面倒臭い〜〜」

しんのすけはテレビに映るアクション仮面の方を見ながら文字通り面倒くさそうにそう言う。

「しんちゃん〜ん!〜!・・・居ないのかな?」

おそらくインターホンを押した人であろう女性の声が遠くから聞こえてきた。

「しんのす・・・はや！」

みさえはお客さんが誰なのか分かったため再度しんのすけに言おうとしたがしんのすけはいつの間にかいなかった。

「どうしたんですか〜!? ななこおねいさん!!!」

いつの間にか姿を消したしんのすけは玄関でななこおねいさんと大原ななこを出迎えていた。
そこに遅れてみさえとレモンもやってくる。

「あら〜 ななこちゃんじゃない。どうしたの？」

みさえがななこに話しかけるとしんのすけが舌打ちした気がしたが気のせいであろう。

「いえ、今日はお祭りがやるというのでしんちゃんたちをお誘いしようかと思ひまして・・・ってそちらの子は？」

ななこは野原家を訪問した理由を言い終えるとレモンの姿を発見し

たのでそう質問する。

「初めまして スノモノレモンと言います」

自分のことだと気付いたレモンはお辞儀をしながら自己紹介をした。ななこはそんなレモンの態度に一瞬驚くとレモンと同じようにお辞儀をしながら自己紹介をする。

「これはご丁寧には大原ななこと言います。こちらこそ初めまして」

「レモンちゃんはオラのお友達で Spanien~~~~~!?!?」

しんのすけがレモンの紹介をし始めるとレモンは慌ててしんのすけの口をふさいだ。

「Spain?」

「いえ・・・えと・・・その・・・そう!酸っぱいものが好きなんです私!」

「ああ、そう言うこと」

レモンは慌てて言い訳を考えたすえ我ながら下手な嘘だなぁと思うような嘘をついたがそこは流石はおねえさんということでごまかされてくれた。

「あなたもお祭りに行く?」

ななこはレモンもお祭りに誘おうとしたがレモンは何故か石化して

るしんのすけを見て「いえ・・・私は「行つてきなさいよ」「断ろうとしたがみさえに言葉をとられてしまった。

「あの・・・ご迷惑でなければ・・・」

「全然。じゃあ、夜になったらまた来るね」

レモンの返答にななこは満足そうに頷くと野原家を出て行った。

「（若干一人迷惑そうな輩が一人いるが無視だな・・・）レモンちやん才セロで勝負よ!!」

「はい」

みさえはそんなことを考えた後レモンと再びオセロをやり始めた。結果みさえは勝つことができた・・・七回目にしてやっと。

そして、時間が過ぎ三人はお祭りをやっている場所に來ていた。因みにななことレモンは浴衣でしんのすけは普段着みさえは留守番

である。

「レモンちゃん浴衣可愛いわね」

ななこはレモンの浴衣（白い生地にたくさんレモンが描かれている）を褒めるとレモンは恥ずかしいのか頬を赤らめていた。

「ありがとうございます／＼／＼これは今日お祭りに行くと言ったらパパが買ってくれたんです」

「へへ、優しいパパなんだね」

「はい！！」

実はレモンが浴衣を手に入れる際辛くなく険しくない物語があったのだがそれはまた別の機会に・・・書くつもりがないので時間を遡らせよう。

「ただいま」

野原家にて七回ものオセロ勝負が終わり家に帰った（みさえに解放された）レモンは今日お祭りに行くということを母であるライムに伝えようとしたが見つからなかった。

「（買い物がお仕事に行ってるのかな・・・）」

家の鍵が開いていたので誰かがいると思いレモンは手当たり次第に探すと父プラムが両親の部屋でノートパソコンと向かい合いながら忙しそうにキーボードを叩いていた。

「今日しんちゃんたちとお祭りに行くから帰りは遅くなります」

忙しそうな父を見てレモンは必要最低限のことを伝えて去ろうとしたが瞬間忙しそうにキーボードを叩いていたプラムの指が止まった。

「レモン・・・今、なんと言った？」

プラムはノートパソコンを見ながら何故か威圧感のある声で聞く。レモンはそんなプラムの態度に怯えながら「あの・・・今日しんちゃんたちとお祭りに行きたいと思っているんだけど・・・」と先ほどよりも小さい声で聞くとプラムが振り向いた。プラムはレモンを見て何かを考えている様子である。

「レモン・・・お前浴衣持ってたか？」

考え終わったのかプラムがそう聞くとレモンは首を横に振った。すると、プラムは何やら大事そうな映像が映っているノートパソコンを閉じると立ち上がった。

「レモン・・・浴衣買いに行くぞ！！」

「いや！あの！え〜と、私服で行くから大丈夫だよ。ていうかパパ
仕事じゃなかったの？」

レモンはプラムの突拍子のない言葉に動揺しながらもなんとか言葉を作ってプラムに伝える。

「ん？仕事なんか後回しだ！さあ、浴衣を買いに行こう！」

どうやらレモンの予想通りプラムは先ほどまで仕事をしていたらしいがまるでそんなこと最初からしていなかったかのように出かける準備をしていた。

「別に私服で行くから良いよ！！」

浴衣が高いことを知っているレモンはすぐに遠慮するがプラムは途端に世界に絶望したかのような表情になった。

「パパに……レモンの可愛い姿を見せてくれないのか？」

「え……でもあの……その」

「遠慮するな」

言う言葉が見つからないレモンにプラムはそう言ってレモンも諦めて浴衣を買いに行ったということである。

因みにプラムがそこまで浴衣をレモンに買ってあげたい理由は彼が極度の親馬鹿だから……なのかは知らないが一応それっぽい理由があった。

元々タイムとプラムは今までレモンに愛情よりも仕事や訓練を与えていたためこれからはレモンに今までの分も愛情を注いであげようと誓ったのである。

しかし、一つ問題があった。

それは・・・レモンは我が俣もおねだりも全くと言っていいほどしないのである。

欲しいものがあつたらそれがどんなに欲しくてもお小遣い（基本的にお手伝いなどでプラムがあげている。たまにライムも）を貯めて買うのである。

要するにレモンは両親にも遠慮して欲しいものも我慢しているという傾向があつた。

それは昔からの教育の結果なのだが両親からしたらもつと色々買ってあげたいため遠慮なく言ってもらいたいのである。

しかし、レモンは先ほども言った通り全くと言っていいほど我が俣もおねだりもしないため二人がそれとなく気づいて与えてあげられないのだ（他にイツハラさんがそれとなく二人に言う場合もある）。

との理由でプラムは仕事をそっちのけでレモンの浴衣を買いに行つたというわけである。

そして、その時に買ったのが現在レモンが来ているレモン模様の浴衣だった。

時を戻して現在。

「たこ焼き食べる？」

ななこはたこ焼きの屋台を見つけたため子供たちにそう聞いていた。

「食べるゾ」

「私は父からお金を貰っているので自分で買います」

自分に素直にそう言ったしんのすけと違いレモンはたこ焼きは食べたいがななこさんに奢ってもらうわけにはいかないっと思っで自分でお金をお店に払おうとした。
だが、その手をななこはゆっくりと握って下におろす。

「たこ焼き三つください」

「まいど」

そして、三人分のたこ焼きを注文した。

「はい、どうぞ」

たこ焼きを受け取った三人は近くのベンチに腰掛けななこは二人にたこ焼きを渡した。

「あの・・・お金払います！」

レモンは慌ててそう言うがななこはゆっくりと首を横に振った。

「良いのよ 今回はお姉さんのおごりだから。っていつか最初からそのつもりだったし」

ななこはそう言ってレモンの頭をなでる。

本当はしんのすけの分は考えていたがレモンの存在を知らなかったため最初から考えていたわけではないがそこはお姉さんとしての優しさだった。

「そのお金はお小遣いにしちゃいなさい」

レモンの頭を撫でながらななこはいたずらっぽく笑ってそう言う。

「え〜と・・・ありがと〜ござい〜／＼／＼／」

レモンはお礼を言うがその言葉は頭を撫でてもらっている恥ずかしさと今日初めて会った人に奢ってもらおうという緊張感によって徐々に声が小さくなり最後の方は聞こえなかった。

「あ〜喉が渴いた！！あっちにかち割りがあるよ！買いに行こう」

「うん」

「はい」

たこ焼きを食べ終えると二人はかち割り（お祭りとかで売っている袋詰め飲み物）を買ったために屋台に向かっていった。

「ななこさんって・・・なんかお姉さんですね」

かち割りを飲みながらレモンは我ながら意味の解らないことを言っ
たな〜と思ったがななこはその言葉を聞くと嬉しそうに微笑んだ。

「本当に！？ありがとう お姉さんうれしくなっちゃったからお好
み焼きも奢っちゃう！」

「わ〜い！！お好み焼きだゾ」

そして、三人は今日のお祭りを120%楽しんだという。

〜レモン帰宅後〜

「パパ、お金全く使わなかったから返すよ」

少し残ったとかそう言うのだったら遠慮なくもらおうかと思ったが
全く使わなかったためレモンはお金をプラムに返そうとした。

「ん？あゝ、良いよお小遣いにしなさい」

「ありがとう」

そして、レモンは2000円（たこ焼きとかが500円計算だと1000円じゃ足りないなというプラムの親ばか・・・優しい考えから）を手に入れ前から読みたかった小説を購入したという。

第15話 スパイとお姉さんと夏祭り（後書き）

カオス

「プラムが親馬鹿なのは作者の勝手な都合なので目を瞑ってください」とうれしいです」

しんのすけ

「要望はまだ受け付けてるゾ」

第16話 ドッジボール?いいえ、土ッ血暴流です。(前書き)

今回はレモンの学校でのお話です。

第16話 ドッジボール?いいえ、土ッ血暴流です。

現在レモンのクラスは体育の時間の為外でドッジボールの準備をしていた。

チーム分けが終わってそれぞれのチームがコートに入っていく。

「絶対に勝とうね!レモンちゃん!」

「もちろん!」

レモンがサヤカ(レモンの友達。詳しくは第9話参照)と一緒にガッツポーズをしていると相手側のコートでは……。

「今日こそはあの女に悔しい思いをさせてあげますわよ……」

レモンを嫌っているアカネ(こちらも第9話参照)が敵対心をメラメラ燃やしていた。

そして、ボールが投げられドッジボールが始まった……。

「レモンちゃん行っけ〜〜〜!!」

サヤカの応援を受けてボールを持っているレモンはアカネに向かってボールを投げ……られなかった。

「えっ!?!」

「いただき!」

クラスの男子のうちの一人が投げようとしていたレモンからボール

を奪ったのだ。

男子はそのままボールをアカネに渡す。

「くらいなさい!!」

アカネは受け取ったボールを唾然としているレモンに投げた。

だが、レモンは何とかボールを受け止める。

「危なかった」

レモンはボールを持つと男子に邪魔される前にサヤカにボールを投げた。

アカネはボールを投げた状態のままだったので必ず当たるはずだった……。

「大丈夫ですか？アカネさん」

だが、アカネのチームの男子がアカネを庇ってボールを受けた。男子はまるで銃弾に撃たれたかのように倒れる。

「相川君!!?」

倒れた男子の名前を呼びながらアカネのチームの男子は相川君に近寄る。

「みんな……後は頼んだぞ……すみませんアカネさん……俺はもう……限界です」

ボールの当たりどころが悪かったのか苦しそうに相川君はそう言う。とアカネのチームのメンバーは涙ぐむ。

「お前はよくやった！後は俺たちに任せろ！」

「ゆっくりおやすみなさい・・・」

男子とアカネがそう言うのと相川君はゆっくりと倒れてそのまま永遠の眠りに・・・つかずに立ち上がって外野の方に走っていった。彼は元気そうだ・・・。

「・・・私が悪いのかな？」

「ううん、レモンちゃんは悪くないよ！」

自分の投げたボールが何やら変な事態を招いたことで苦笑いしているレモンだったがサヤカはすぐにレモンを慰める。

だが、現在はドッジボールの途中には変わりはない。

レモンとサヤカとほかのチームのみんなはすぐに身構える。ボールは相手のチームが持っているのだから。

まあ、どうやらこちらのチームにはスパイがいるらしいが。

先ほどレモンからボールを奪った男子、通称佐藤君はレモンに近づいて行った。

「ねえねえ、レモンちゃん手を繋ごうよ」

「ゴメン・・・断る」

ドッジボールの途中で手を繋ごうと言われても断る以外の結論が見つからないレモンは速攻で断ったがその瞬間レモンめがけてボール

が飛んでくる。
どうやら気を引く作戦らしい……。

「やっぱり繋いであげる」

「えっ？」

ボールが飛んできたことに気付いたレモンは佐藤君と手を繋いだ。そして、そのまま両手で佐藤君の手をつかんで力いっぱい回転する。不意をつかれた佐藤君は相手が女の子の力にも関わらずよるめいてしまい……。結果レモンの代わりにボールに当たってしまった。

「佐藤！！お前……。裏切ったな！！」

「すまない……。俺がスパイだってばれちゃったようだ……」

佐藤君は何故か敵側のチームに謝りながら外野に移動していく。

「やりますわね……。レモンちゃん」

アカネは不敵な笑みを浮かべながらレモンを見る。まるでライバルの活躍を見ていたかのようにだった。

いや、彼女の場合おそらくその通りであろう……。

「アカネちゃん……。これってドッジボールだよな？」

レモンは苦笑いしながら聞く。

絶対このドッジボールは純粹に楽しめないと感じたからだ。

「ええ、土ッ血暴流ですよ」

「何か発音おかしくない？」

レモンとアカネがそう言っている間にレモン側のチームの生徒がボールを相手に投げていた。

それを男子がキャッチする。

男子はボールを持つと投げようとせず、すぐさまアカネに近寄ってきた。

「アカネさんどうぞお納めください」

そして、立膝をついてボールを献上した。

アカネはボールを受け取るとレモンの隣にいたサヤカに向かって投げた。

「あっ！しまった〜!!」

サヤカはかわすことができずにボールに当たってしまふ。

「レモンちゃん・・・この試合絶対に勝ってね」

「分かった！」

サヤカはレモンに笑顔でそう言い、レモンも笑顔で答えるとサヤカは静かに外野に行った。

そして、試合は白熱し、内野はレモンとアカネの一騎打ちになった。

「これで私の勝ちですわね」

現在はアカネがボールを持っている。

レモンは絶体絶命だった。

何故なら本来味方であるはずの外野ではあの佐藤君が全てのボールを持ち去ってアカネに渡してしまうため……。

つまり、レモンは事実上一人で戦わないといけないのだ。

「当たり前なさい!!」

アカネのボールを受け止めてレモンはアカネめがけてボールを投げるがアカネはそれをかわした。

普通そこで外野の人が頑張ってくれるはずだが佐藤君がささっとボールを取ってアカネに渡す。

「(何で誰も何も言わないんだろ……?)」

レモンは疑問に思ったがその間にもボールは飛んでくるため考える暇さえなかった。

アカネの投げたボールをレモンは受け止めるとアカネめがけて投げる。

そして、それはまたかわされた。

「も〜らい!!」

「ダメだよ!!」

再び佐藤君がボールを取ろうとしたがサヤカが佐藤君よりも早くボールを取った。

「あつ、国枝!何するんだよ!?!」

佐藤君は騒いだがサヤカはすぐにアカネめがけてボールを投げる。

「ふんっ！こんなの当たりませんわ！」

アカネはそれをかわしたがレモンは限界まで前に行ってボールを取った。

「じゃあ、これはどうかな？」

そして、そのまま投げる。

かわした瞬間で何もできないアカネはボールを取ることができずに当たってしまった。

「やった〜！！レモンちゃん凄い！」

「ううん、サヤカちゃんのおかげだよ」

こうして、体育の時間に行われたドッジボール……いや、土ッ
血暴流は終わりを告げた

第16話 ドッジボール?いいえ、土ッ血暴流です。(後書き)

レモン

「これ何?」

カオス

「なについて世間一般に行われているドッジボールだけど?」

レモン

「すでに名前変わってるじゃん!」

カオス

「いや、サブタイトルが思いつかなかったからさ」

レモン

「それだけのためにドッジボールの名前を変えたの?」

カオス

「男にはな……やらなければいけない時があるんだよ」

レモン

「私は女だけどこれだけは言える。少なくとも今はその時じゃない

!」

カオス

「要望お待ちしてまゝす」

第17話 春日部防衛隊VS百獣の王(前書き)

今回は春日部防衛隊に命の危機！

第17話 春日部防衛隊VS百獣の王

「うわああああああん!!」

ある日の通行人が誰もいない道路でおにぎり頭の少年が泣きながら走っていた。

後ろには・・・ライオンが追いかけてきているというなかなか日常ではお目にかかれない状況で。

「マサオ君頑張って!!」

「アロハ」

ライオンの後ろではレモンたちがライオンに攻撃してライオンのスピードを下げたおにぎり頭のマサオに追いつかないようにしていた。若干一人ダンスを踊っていたが。

何故こんな状況になっているのか？

それは今から約15分前に遡る。

「じゃあ、今日は我ら春日部防衛隊の会議を開始しよう」

しんのすけの家で風間がそう言うとみんな「おー!!」と手を挙げる。

「さて、最近活動していないけど何か案がある人はいるかな?」

「町のゴミ拾い!!」 マサオ

「逃走中の犯人の逮捕」　ボーちゃん

「おままごとの新しい道具の購入」　ネネ

「園長先生の顔を元に戻してあげよう」　しんのすけ

という風にしんのすけたちは好きに意見を言う。

しんのすけにとって園長先生には本当の顔があるらしい。

「とりあえず・・・ゴミ拾いが一番良いんじゃない？」

レモンは今出た意見で一番防衛隊らしい（ほかがあまりにも防衛隊らしくないのかもしれないが）意見を採用する。

だが、その瞬間運命の時は訪れた。

暇つぶしにつけていたテレビが突然臨時ニュースを放送してきたのだ。

『・・・というわけで動物園を脱走したライオンは現在埼玉県春日部市にいますのでみなさん外には決して出ないでください』

ニュースが終わるとしばらくみんな呆然とする。

そして、風間が立ち上がるこう宣言した。

「春日部防衛隊！ライオンを確保するぞー！！」

「くくくお~~~~！！」「くくく」

風間の宣言に拳を振り上げるみんな。

そんな状況でレモンだけは自分たちがライオンと接触しないように祈っていた。

だが、運命は時には非常なのだ。
結局彼らはライオンを見つけることができた。

本当はライオンを見つけたら二人が近くの家で動物園に電話してほかの者がそれまでライオンをそこにとどめておくという結構無茶な作戦だった。

しかし、ライオンはお腹がすいていたのであろう彼らを観た瞬間おにぎり（マサオ）を食べるために襲い掛かってきたのだ。
そして、最初の方になったという訳である。

「マサオ君頑張って食べられないようにしなさい！」

「無茶苦茶だよ～～！！！」

ネネの言葉にマサオは泣きながら逃げ続ける。

「マサオ君！これを！！！」

「しんちゃん………？」

踊り終えたしんのすけはマサオに追いつくと頭に何かを置いた。

世間一般に“のり”と呼ばれる食べ物……。

その瞬間ライオンは涎を垂らしながら加速しネネとしんのすけはすぐにマサオから離れる。

「しんちゃんの馬鹿あああああああああ！！！！！」

マサオは大泣きしながら走っているが目の前のおにぎりをどうしても食べたいライオンはどんどんマサオに追いつく。

「マサオ君!?!」

それを見たレモンと風間はどこからか木の棒を持ってきてライオンに投げつける。

ライオンは一瞬レモンと風間を見たがすぐにマサオを追いかける。

「マサオくん!これを」

すると、しんのすけが走ってきてマサオの頭にはちみつを塗った。途端にライオンのスピードは上昇する。

同時にレモンのパイフォンが鳴り始めた。

「もしもし!うん、分かった!」

レモンは電話を終えると皆の方を向く。

「幼稚園に職員が待機しているから頑張っ!」

レモンがそう言うとポーとネネが先っぽを輪にしたロープをライオンの頭にひっかける。

すぐにマサオ以外の全員でロープを引っ張るがライオンに力負けして逆に振り回されてしまう。

そして、彼らはライオンの背中に乗ってしまった。

「ふえ〜ん!幼稚園だよ〜ってうわあ!」

やっと、幼稚園が見えたと思ったらマサオは転んでしまう。
ライオンの姿を見つけた職員が急いで駆け寄るがライオンの方が早い。

「マサオ君！！」

それに慌てたレモンはスパイヨーヨーをマサオに向かって投げる。
マサオは慌てながらもそれを持った。

「みんな！私の体を支えてて！！」

その言葉でライオンの背中でみんながレモンを支えるとレモンはヨーヨーを引いた。

すると、レモンはマサオの方に一瞬引つ張られそうになるがみんなが支えている分こちらの方が重くマサオがこちらに向かって引きずられてくる。

ライオンは走っている途中だったためマサオを捕まえることに失敗しマサオもライオンの背中に乗った。

そして、ライオンは職員に麻酔を打たれてその場で気絶する。

「君たち！！」

職員が怒った顔でレモンたちに近づいてきた。

外に出るなど警報したはずがライオンに追われたり背中に乗っていたりしていたのだから無理もないかもしれない。

「みんな、逃げろ！！」

風間のその言葉でみんなすぐにその場を離れた。

第17話 春日部防衛隊VS百獣の王（後書き）

レモン

「しんちゃん……邪魔しかしてないじゃん!？」

しんのすけ

「いや、それほども」

レモン

「褒めてない!」

しんのすけ

「お話募集しています」

第18話 いつもの日常（前書き）

久しぶりに書いたわ・・・。

え！！！！！」

風間がそう叫んでやつとみんな話を聞く体制に入る。

「じゃあ、今回の任務は「まだ、ボーちゃんがいないゾ」ああ、もう！！」

話を始めようとした矢先にしんのすけに話の筋を折られ風間は髪をかき乱していた。

慌ててレモンが抑えに入る。

「まあまあ、落ち着いて」

やつと、全員集まりリーダー（相変わらずそう思っているのは本人のみ）の風間が話し始めた。

「え、今回の任務は……………何が良いかな？」

その瞬間、全員が凍りついた目で風間を睨みつけた。

レモンとマサオはそこまで冷たい視線を送ってはいないが楽しく遊んでいたところを邪魔されたほかの三人の視線は恐ろしく冷たかった。

風間は「うっ……………」と呻きながら必死に今回の任務を考える。

しばらく考えた風間は意見を発表した。

「そういえば、最近川にゴミがポイ捨てされてるってママが言ってたな。今日はみんなで川の掃除をしよう！ー！」

「まあ、良いけど」 レモン

「だるい」 しんのすけ

「え、めんどくさい」 ネネ

「じゃあ、ゴミ袋持ってこないとね」 マサオ

「ポー、珍しい石……あるかも」 ポー

という風に聞き分けの良いレモンと綺麗好きなマサオとストーンコレクター（作者命名）のポーは風間の案に乗ったがしんのすけとネネは拒否した。

だが、そこに魔王まおうが現れる。

「あら、ゴミ掃除？行ってらっしゃい」

話を聞いていたのかみさえが部屋に入ってくるなりそう言ってきた。すぐさま、しんのすけが拒否の意思を表す。

そして、しんのすけとみさえの全面戦争が幕を開けた。

「オラはいかないぞ」

「あなた、家においてもゴロゴロしてるだけでしょ？」

「オラだって忙しいんだゾ！シロの散歩とかひまのお世話とか」

「シロの散歩……最後いつ行った？」

「え〜と、5日前かな？」

「はい、ゴミ掃除いつてらっしゃ〜い」

幕は閉じた。

そもそも、しんのすけに勝ち目などなかった。

結局しんのすけは行くことになり自分だけがいかないというのも嫌だということネネも行って川のゴミ掃除を始めた。

「あっ！？空き缶が捨てられてる〜。誰だよコレ？」

「あっ、それオラオラ」

「しんのすけ〜〜〜〜〜〜！！！！！！」

風間がサイダーの空き缶を見つけて愚痴をこぼしたらあっけなく犯

人は見つかった。

レモンもゴム手袋を装備して川のゴミを捜していく。

空き缶空き缶空き缶空き缶空き缶携帯電話空き缶空き缶空き缶
缶死体空き缶死体空き缶缶ドラム缶空き缶缶カントムの腕空き缶海パン
死体。

レモンは震えた。

今、何がみつかった？

そこにマサオとネネが寄ってくる。

「わあ、空き缶の数がすごいね」

「うわっ、ドラム缶やカントムの腕や海パンまである」

「ふ………二人とも？もつと大きなものもあるよ？カントム
の腕じゃなくて人の腕が六本も」

のんきに空き缶の数やらほかの物に驚いているマサオとネネにレモンが怯えた声でそう伝える。

そう、レモンの言うとおりなんと小学生ぐらいの男の子と男の子の
両親らしき男と女が死人のようにプカプカ浮いていた。

「………逃げるわよ」

「待つてよネネちゃん！！！」

すぐさまネネが逃げようとしたがマサオが強引に引き留める。

レモンは驚いたまま動かない。

因みに海パンの持ち主はすぐに見つかった。
男の子の下半身が丸出しだからだ。

「おっ！オラも負けないゾ！ブリブ……すいません」

それを見たしんのすけがズボンを下ろしてケツだけ星人をやるうとしたがレモンたちに睨まれて謝りながらズボンを上げた。
死体を見ていた風間は医者のようにじっと考える。

「よし！警察を呼ぼう！」

「どうしてですか？」

「どうしてってアンタ！そりゃ……ぎゃあああああああ
あ……！」

考えた末に警察を呼ぼうと提案した風間に質問してきた声があったのでネネが答えようとするとネネは絶叫とともに腰を抜かしてしまった。

風間に質問したのは父親らしき男だからだ。

「生きてたんですか？」

レモンの言葉を見殺して男は女と子供をゆする。

「おっい、いい加減起きろ。タカシお前海パン落ちてるぞ」

「えっ、マジ！」

「あら、いつのまにか寝てたわね」

その瞬間珍しく防衛隊の意思が一つになった。

「「「「「こんなところで寝るな！間際らしい！！！！」」」」」

結局その家族は自分たちと一緒に流されていた携帯電話を持って帰ってしまった。

「あゝ、もうムシヤクシヤする！！」

その家族への怒りに燃えたネネは近くに流れていたドラム缶を思いっきり蹴飛ばした。

《・・・・・・・・・・・・・・・・痛い》

ネネは蹴り続ける。

どうにもこうにも怒りが収まらないのだ。

《痛い・・・・・・・・・・》

「ねえ、今声がしなかった？」

「・・・・・・・・・・した気がする」

マサオが不安そうにそう言うのとレモンが冷や汗をたらしながらそう言った。

だが、ほかの人には聞こえなかったらしい。

しかも、ネネはうさぎのぬいぐるみをどこからか取り出してそれを

「ただいま」

「あら、レモンお帰りなさい」

あの後公園でみんなで遊んだあとレモンは自宅に帰ってきた。

レモンは冷蔵庫からオレンジジュースを出してコップに注ぐとソレを飲みながらリビングに行ってなんとなくテレビをつける。

現在はニュースがやっている。

本日埼玉県春日部市の川でバラバラ死体が発見されました。被害者の兎原なつみさんは殺された後体をノコギリでバラバラにされた後ドラム缶に入れられて川に捨てられたようです。警察は殺人事件として捜査を進めています。

レモンは手に持っていたコップを落してしまった。

幸い中身は全部飲んでしまったから床に被害はないがレモンはニュースにくぎ付けになる。

「ドラム缶って………まさか………はは」

レモンは乾いた笑いしかできなかった。

そこにライムがやってくる。

「レモン、急で悪いんだけど仕事頼める？ある悪徳業者が多くの殺人や闇金とかやっているらしいんだけど証拠がみつからないのよ。被害者の方々からなんと少しでもそいつを捕まえてくれっていう依頼があったわ」

「分かった。証拠を集めてくれば良いんだね？」

「そうよ」

ライムにそう言われるとレモンは準備を始めて次の日の朝さっそく仕事のために悪徳企業の社長をやっている男の屋敷に忍び込んだ。

そして、三日経過してもレモンは帰ってこず連絡もくることはなかった。

第18話 いつもの日常（後書き）

ネネ

「ももももしかして、レモンちゃんのろいかなんかで……？」

カオス

「勿論」

風間

「嘘つけ！」

カオス

「ばれたか。そうだよ！本当は呪いなんかじゃないさー！」

レモン

「じゃあ、何で私帰ってこないの？」

カオス

「ん？だって、次回から長編だし。ていうか、今回の話はプロローグだよ」

レモン

「絶対違うからー！！だいたいいつもこんな日常送ってないし」

カオス

「というわけで、次回から長編です」

レモン

「どごいっわけでー!?といっつか何でー!?」

カオス

「あゝ、言っの忘れてた。今回もニコさんの要望です」

レモン

「全く・・・」

第19話 心配してくれる友達(前書き)

今回から長編!!

第19話 心配してくれる友達

「おかしい……」

スノモノ家のキッチンでライムはそう呟いた。

レモンが任務に行ってから今日で三日目……。

昔から任務で遠出させることはあったため三日経っても帰らないことには全く心配していない……。

現に一週間以上任務に行かせたこともあるのだから……だが、
？連絡？がこないのはおかしかった。

こちらから連絡しても出ない……嫌でも最悪の想像が頭に浮かんできた。

「ねえ……？レモンは見つかった？」

「いや……全然だめだ……」

昨日からレモンを単独で捜索していたプラムはライムの問いに悔しそうにつぶやいた。

状況が状況の為警察に言うわけにもいかない……いや、言ったとしても説明のしようがない。

「娘がスパイの任務で悪徳業者の屋敷に行ったつきり帰ってこないんです!!」

……信じてもらえとは思えない。

そう考えているとインターフォンが鳴った。

二人はすぐに玄関に飛び出す。

「~~~~~こんにちは~~~~~!!!」

だが、訪問者は娘ではなくしんのすけたちだった。

ライムが時計を確認すると時刻は午後三時……すでに、幼稚園は終わっているだろう。

「あ……………」

「何かしら？」

「レモンさんはどこに行っただんですか？」

「!？」

ライムは風間の言葉に固まるしかなかった。

相手はレモンを心配してきてくれたのだろう……それはとても嬉しい。

娘を心配してくれる友人ができただけで春日部に引っ越したかいがあるのだから。

だが……しんのすけはともかくほかの子たちはレモンがスパイだということを知らないだろう。

それでは説明のしようがない。

「最近……………レモンちゃんの姿を見ないから心配なんです!」

「学校にも来ていないそうですし!」

「ボ……………大丈夫？」

ネネとマサオにボーがそう言ってくる。
プラムは驚いた表情をした後顔を隠しながら部屋に戻って行った。
泣いているのだろう……。今まで孤独だった娘を心配してくれる子たちがこんなにいるのだ。

「レモンはね……。誘拐されたかもしれないの」

だから、教えてあげよう。

可能な限り嘘をつかないように……。尚且つ、あの子がいつも通りに帰ってこられるように。

「もしかしたら、遠くの町にある金塚って言う人の家にいるのかもしれない」

金塚……。今回の標的だった悪徳業者の社長の名前だった。

証拠はない……。だが、今の状況ならレモンは金塚に捕まったと考えるのが自然だった。

「じゃあさ、オラ達でレモンちゃんを迎えに行こうよー!!」

唐突にしんのすけがそう言う。

先ほど？誘拐されたかもしれない？と言ったばかりのはずなのにその口調はとても軽い。

まるで、旅行から帰ってくる友達を迎えに行こうと言ってるかのよう……。うに。。。。。

「警察には言っただんですか？」

「いえ……。証拠もないし」

本当は別の理由もあるのだがあえて言わない。
ライムの言葉を聞くと風間は少し考えて……………。

「よしっ！！春日部防衛隊の出番だ！！」

「……………は？」

思わずまぬけな表情をするライム。

春日部防衛隊についてはレモンから聞いている……………春日部の
平和を守る正義の味方ということだ。

「うんっ！！行こう！！」

「そうよ！私たちが行けば良いのよ！！」

「ボー！」

ライムが啞然としている間にみんなは勝手に話を進めていく。
その背後からプラムが慌てて飛び出してきた。

「あら？どうしたの？」

「なんか急に接待ができちゃってさ……………くそっ！！今日は
休暇を取ったつてのに！！」

愚痴を言いながらプラムは仕事に出かけて行った。

政治関連の仕事をしているプラムはこういう風に突然の呼び出しも
ある。

いつもだったら断るのだが政治の場合評判も大切なため渋々行くこ

ともある……今回はどうやら行かないとやばいらしい。

「……………どうしてなのよ」

。流石に犯罪者の家に子供たちを連れて行くわけにもいかない……。

本当にそうだろうか？

この子たちだったら……………あの子を救えるんじゃないか？

あの子を……………私たちを変えたあの子とその友達だったら……

。

ライムはしんのすけを見つめる。

しんのすけは――――

ケツ丸出しで踊っていた。

「ブリブリブリブリ~~~~~」

「・・・・・・・・・・・・・・・・やはり、子供ね」

期待してしまった自分に嫌悪感を抱いてしまった。

「おいっ！やめろよ！！」

「そつよ！！今、大事な話しているのよ！！」

慌てて風間とネネがしんのすけを止める。

風間達は金塚の家を知らない・・・・・・・・つまり、ライムに連れて行ってもらわなければならぬのだ。

ここで、ライムの機嫌を損ねたらレモンを救いに行けなくなってしまう。

それは嫌だった。

「・・・・・・・・一度家に帰ってお家の人の許可をもらってきなさい」

ライムの言葉にケツを振っていたしんのすけもそれを止めていた風間達も動きを止めた。

「え・・・・・・・・ええと、それはどう意味で・・・・・・・・？」

「行くんでしょ？レモンを助けに」

ライムの言葉を聞くと一斉にみんな、笑顔になった。そして、各自自宅に戻っていく。

「よろしいのですか？奥様」

しんのすけたちが出ていくと部屋で待機していたイツハラがその声をかけてきた。

ライムは苦笑するとイツハラの方に振り向く。

「あまり時間をかけるとあの子がどうなるか分からないわ……
・子供たちが戻るまでに作戦を考えるわよ」

「かしこまりました」

「……………どうやってここを出よう……………」

レモンはそう呟きながら考える。

だが、三日かけて見回したそこにはすでに逃げ道がないことは分かっていた。

レモンは気づいたらどこかの地下室なのだろう……………牢屋に

閉じ込められていた。
服も白いドレスに着替えさせられておりスパイヨーヨーやパイフォ
ンなどの道具も盗られた。

足音が聞こえる……誰がここに向かってきているのかはす
でに分かっていた。

自分をここに閉じ込めている連中は素晴らしいことに三食をくれる
上におやつまでくれる。

昼はすでに渡されたのでおやつでも渡しに来たのだろう……。
扉が開く音が聞こえると足音がさらに近づきレモンの入っている牢
屋の前にその姿が現れた。

「はあ〜い おやつを持ってきたわよ〜!!」

水色の髪を伸ばしたその女性は右手に持ったアイスを鉄格子の隙間
からレモンの前に置く。

「……………いつまで、私を閉じ込める気？」

「そっねえ〜〜〜〜〜」

レモンの問いにその女性は人差し指を唇に当てながら考える。
見た目20位の色っぽい女性だ……。
その女性は形の良い唇を曲げると答えを言った。

「永遠……………かな？」

レモンは冷や汗が流れるのを感じた。

自分は任務に失敗した……。
もう少しのところをこの女性に捕まってしまったのだから……。
。。。
その時の記憶が嫌でも思い出される。

屋敷の部屋の一つに置かれていた五つのドラム缶。

それを見た瞬間に川で発見したドラム缶を思い出した。

周りに誰もいないのを確認してレモンはそのドラム缶の蓋を開けた。

「……………ツツツツ!!!!????」

悲鳴を上げそうになった自分の口を必死に抑えた。

吐き気を感じた……。

だが、勇気を出してほかのドラム缶の蓋を開けていく。

五つ目のドラム缶の中身を確認した瞬間レモンの体から力が抜けた。
レモンが倒れるとつかんでいたドラム缶も一緒に倒れその中身が露
わになる。

バラバラの死体が……。

「ダメだよ！人様のお家に侵入しちゃ」

声が聞こえた。

薄れゆく意識の中レモンは声のした方を見る。

そこには水色の髪の女性がいた。

足音は聞こえなかった……。

気配は感じなかった……。

「おやすみ」

女性は笑顔でそう言う。

「……………迂闊だったわ……………あなたみたいな人を雇っていただけなんて」

「この家の主人は結構やばいことしてるからね〜!!」

「あなたは一体何者なの？」

レモンは一気に核心をついた。

気が動転していたとはいえ気配を完全に消して自分を拘束するなんて一般人ではない……。

「私はカレンだよ〜 言ったでしょ？」

「名前じゃなくて……」

「もう……. しょうがないな。あなたはスパイなんですよ？私はね…….」

その女性――カーレンは笑顔のままそこまで言うとそばに置いておいた自分用のアイスを一口食べた。
食べながらレモンにもアイスを食べるように勧める。
仕方なくレモンもアイスを食べ始めた。

「くのいちだよ」

聞きなれない言葉にレモンはアイスを落としそうになった…….

第19話 心配してくれる友達（後書き）

レモン

「あのさ……なんで忍者が出てるの？」

カゲロウ（元カオス）

「いや、だってさ……それぐらいじゃないとスパイに勝てないじゃん!!」

カレン

「そうそう じゃあ、レモンちゃん~~~~~一緒に風呂に入ろうよ」

レモン

「はいっ!? 私って捕まってるんじゃない……ちよっ! だっこしないで! 降ろして~~~~!!」

カレン

「お風呂 お風呂」

第20話 スパイとくのいちのお風呂劇場（前書き）

敵に捕まってしまったレモン……果たして彼女はどんなひどい仕打ちを受けてしまうのか……？

第20話 スパイとくのいちのお風呂劇場

「離しなさい~~~~~!!」

「おとなしくしなさい」

レモンはその場で子供のようにはぐれた……子供だが。自分は捕まっている……牢屋にいるはずなのに……。

なんで、この女に抱っこされているんだろう？

必死に暴れてもカレンは優しくレモンを抱いていた。

「ほら〜ついたよ」

目的地に着いたらしく降ろされたレモンが見たのは……大浴場。慌てて隣を見るとすでにカレンは服を脱ぎ始めていた。

「ちよっ!?何してるの?」

「何ってレモンちゃんもそろそろお風呂に入りたいでしょ?私も入ってあげるよ」

確かにすでに三日間風呂に入っていないレモンだったが……。

私……捕まってるのよね?

思わず疑問を抱いてしまうほど優遇されていた。

拷問などを受けた覚えもなければ牢屋にモニターがつけられて監視されているわけでもない・・・どう考えても色々な意味で怖かった。

そこまで考えていると不意にカレンの手がレモンの服をつかんだ。

「な・・・なななに!?!」

目の前にはすでに服を全て脱ぎ終えてバスタオル姿のカレン。そして、満面の笑顔でこう言った「—————」

「脱がしてあげる」

「きゃあああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああ!?!?!」

スノモノ家では一度帰宅したしんのすけたちが集合していた。
みんなそれぞれリュックを背負っている・・・武器でも入っているのだろうか?

「じゃあ、これから電車に乗って行くわよ」

「「「「「はあ~~~~~い!?!?!」」」」」

ライムの言葉に右手を挙げながらしんのすけたちは返事をした。本当は走る、もしくは車で行きたかったのだが……。彼らの身体能力では走っていける距離ではないのと車を……。プラムが仕事で乗って行ったため使えないのだ。なんだか、のんびりしていると思いつつも『電車』という通行手段しか思いつかなかったことにライムはため息をついた。

「レモンちゃん！そんなに怒らないでよ」

カレンの必死な呼びかけをレモンは無視していた。

結局、レモンの抵抗もむなしく簡単に裸にされてしまったのだ……。

全裸になったレモンは傍に合ったバスタオルをつかむとすぐに大浴場に入って行って現状に至る。

「ねえ？レモンちゃんってば？無視しないでよ！！裸のお付き合いしようよ」

カレンに対して後ろを向いていたレモンがチラッと後ろを見るとカレンが悲しそうに声をかけている。

仕方なく反応することにした。

「大体……。なんで服があんな簡単に脱げたのよ！！」

レモンは大人げないと思いつつも大声で文句を言った。

脱がされた時身にまもっていた白いドレスはまるで、変装していた人が変装を解いた時のように（もしくは分厚いコートを着ていた人が一瞬でコートを脱ぎ捨てるかのように）一瞬で脱がされたのだ。どういう原理か知らないがその際にカレンの手に渡っていたのは白いドレスだけではなくレモンの下着も含まれていた。つまり、レモンは抵抗できなかったというよりも抵抗する瞬間もなかった。

「え〜！だって、私くのいちだし！」

カレンはちょっと困ったような笑顔でそう言ってくるがレモンは全く納得できなかった。

「だけど……これはチャンスではないかと思う。」

お互いが裸の状態で相手は完全に油断している。

相手の忍術とか身体能力とかは分からないが……この屋敷を脱出できるのではないか？

レモンが後ろを見るとレモンが相手をしてくれなくて寂しくなったのかカレンはその長く綺麗な髪を洗っていた。

チャンス到来！！

カレンに気付かれないように湯船から出ようとレモンは静かに移動する。

「あつ、そうそう！逃げたりしたら首に鎖つけて裸の状態で犬のようにレモンちゃんを散歩させるから」

・・・・・・・・・・・・・・・・湯船を移動していたレモンの足が止まった。髪を洗っている状態でカレンはまるでこちらの考えと行動を読んだかのように明るい声色で恐ろしいことを言っただけだ。そんなことを行えるはずがない・・・・頭では分かっているけどもんだか・・・・・・・・実行されそうで怖かった。

(この人・・・・・・・・底が知れない)

「おゝい！風呂入ってるのか？私も入っていいか？」

脱衣所から声がしたかと思うとドアが開きだした。

レモンは慌てて湯に潜った。

声が男のだったのだ。

一応この家に住んでいるのは悪徳企業の社長である金塚のみ(のはずだった)だから声の持ち主は金塚本人なのだろう。

だが、その開こうとしていたドアに何かが飛んで行った。

「ぐう！？」

「入れたらどうぞ」

いつの間にか髪を洗い終えていたカレンが右手に固形石鹸を持ちながら笑顔でそう言っている。

レモンは湯船の中なのに身が震えるのを感じた。

・・・・・・・・・・・・・・・・投げられた石鹸の球速は恐ろしく速かった。

つまり、彼女は自分の雇い主を本気で撃退しようとしたのだ。

「や・・・・・・・・やめておこつ」

震える声が脱衣所から聞こえてきた。
すぐに慌てて走る音だけが聞こえてきた。

「あの……今の人って？」

考えすぎだと思いつつもそう質問した。

「ああ、ごめんね〜！今の人が私の雇い主でああなたの標的」

……考えすぎではなかった。

彼女は雇い主を本気で撃退していた。

「あつ、髪洗ってあげる……おいで〜」

「いい！自分で洗うから！！」

「まあまあ、そう恥ずかしがらずにさ……それとも、
強制がお好み？」

「……洗ってください」

本当に強制で体を洗われそうなのでおとなしく出ていくことにした。
椅子に座るとカレンがレモンの髪を洗い始める。

優しい手つきだった……まるで、母親が洗ってくれるかのよう
に。

「ってどこ触ってるの!？」

「うっん、まだ胸は小さいんだね」

「放つといて!!」

すぐにカレンのもとを離れてシャワーで髪を洗った。
呼吸が荒い……。

「あははは!!レモンちゃん可愛い」

そう言いながらカレンがレモンに抱きついてきた。
レモンの顔はその豊満な胸に挟まれて呼吸ができなくなる。

「うぐ……うが……」

必死に押すとあっけなく離れてくれた。

……ちよつと、待った。

「私は人質でしょ!!何この扱い!？」

自分で言うのも若干おかしいと思いつつも言いたくてしょうがなかった。

何というか……捕まっている気がしない。

というか……本当に彼女は雇われている身なのか？

レモンにそう言われるとカレンは人差し指を口元に当てながら何やら考え事をしていた。

「……もつと、ひどい扱いを受けたいの？何
だったら今から裸で犬のように散歩する？人としてだったら付き合
うけど？」

「……なんでもないです」

これ以上何かを言うことに身の危険を感じたためレモンはこれ以上自分の扱いには触れないことにした。
自分からひどい扱いを受けたいとは思わないし。

「そつか 良かった〜レモンちゃんの変態じゃなくて!.....
じゃあ、体洗ってあげる」

「変態はあなたでしょ!!」

ゆっくりと迫ってくるカレンに危険を感じたレモンは慌てて脱衣所に出た。

幸い、体の方は湯船に入る前に洗っていたため問題ない。

「はあ.....はあ!つてあれ?バスタオルは?」

「はい」

バスタオルを捜しているとカレンによって頭からバスタオルをかぶせられた。

そのまま、頭を拭かれる。

「風邪引いちゃうよ〜」

「あ.....ありがとう」

カレンに渡されたバスタオルで体を拭いてあらかじめカレンが用意していた女の子用の服に着替えようとしたとき.....見てしまった。

見えにくいところに隠されていた………鎖を。

あっ、そうそう！逃げたりしたら首に鎖つけて裸の状態で犬のようにレモンちゃんを散歩させるから

大浴場で言われたカレンの言葉が甦る。

「ねえ……？もし、私が逃げたときにやるって言ったこと……あれ、本気だったの？」

206

「勿論 そろそろ、牢屋に帰ろうか？ごめんね〜本当は部屋に入れてあげたいけど形だけでも捕まっているってことにしないと私がこの家の主人に怒られちゃうからさ〜」

怒られる原因はほかにあるんじゃないか……？
そう思えて仕方がなかったがレモンはカレンに連られて再び牢屋に入れられた。

「後で夕飯を持ってくるよ〜」

カレンは笑顔でそう言つと地下室を出ていく。

レモンは下調べが足らなすぎたことを心底後悔した。

あの女は………謎すぎる。

「……………逃げられるかな？」

思わずつぶやいてしまつが逃げられる自信が微塵もでてこなかった。

第20話 スパイとくのいちのお風呂劇場（後書き）

カレン

「いや〜っ！お風呂楽しかったね〜 また、今度一緒に入る」

レモン

「これさ……前回の後書きと本編が繋がってた気がするんだけど？」

カゲロウ

「【この物語は前回の後書きとは関係ありません】……この看板を張ってれば構わないだろ？」

レモン

「私が構う!!」

第21話 カレンの思惑（前書き）

急いで書いたためか内容がグダグダになってしまいました・・・。

第21話 カレンの思惑

「みんな……準備は良い？」

時刻は真夜中の0時。

ライムはそう言って周りを見渡した。

そこにいたしんのすけたち五人は静かに頷く。

これから、レモンを助けるための作戦を決行する気だった。

「良い？私が警察として金塚に事情聴取をするからその間にあなたたちはレモンを捜して」

「はい」

ライムの言葉に風間が代表して答えた。

作戦は至って単純。

イツハラがどこからか調達してきた警官の制服を身にまとったライムが金塚に事情聴取をしてその間にしんのすけたちがレモンを捜すというものだ。

本当はもつと安全で確実な作戦もありそうなものなのだが……幼稚園児を使うとなると複雑なことはできない。

それに、もし、しんのすけたちが見つかったとしても警察の立場を使って何とか救うことかできるというのも今回の作戦の理由の一つである。

作戦開始を0時にしたのは少しでも相手の判断力や活動を鈍らせるためだ。

ライムがインターホンを押しても誰も出てこない。
真夜中なのだから寝ていてもおかしくはないだろう。
だけど、起こす必要がある。

ライムが何度もインターホンを鳴らすとインターホンから怒声が聞こえてきた。

「なんだ！？今、何時だと思ってるんだ？今日は何の予定もないはずだぞ！！」

「すみませ〜ん。警察の物です・・・少し、お宅に話を伺いたくて」

「け・・・警察！？・・・わかりました、どうぞお入りください」

その声と共に目の前にあった巨大な門はライムを迎えるために開きだした。

ライムが庭に入ってドアの前まで来るとしんのすけたちは散らばる。

「やあ、こんばんは・・・今日はどんな用で？」

ライムがドアを叩くと急いで着替えたらしくスーツを着た三十代半ばの男性が出てきた。
金塚本人だ。

多くの人を犠牲にして莫大な富を手に入れた犯罪者・・・。

「最近、殺された人の遺族であなたが犯人だと言い張る人がいるもので・・・夜分遅くにすみませんがしばらく時間を頂けないでしょうか？」

「ええ、構いませんよ……」

金塚の許可をもらうと二人は屋敷に入っていく。

「あつ、すみません……トイレをお借りしても？」

「ああ……その突き当りを左に曲がればありますよ」

「ありがとうございます」

ライムは金塚に軽く頭を下げるとその場を去った。

そして、トイレにはいかずトイレのもっとも近くにあった窓を開ける。

「みんな！入ってきなさい」

ライムがそう声をかけると窓の下で待機していたしんのすけたちがライムによって屋敷の中に入れられた。

あらかじめ、屋敷の見取り図で待ち合わせ地点を決めていたのだ。

「急いであの子を捜して！見つかったら電話を」

「はい！！」

ライムの言葉に風間が返事すると五人は一塊になってあっちこっちの部屋を捜し始めた。

金塚は結婚もしていなければ使用人も雇っていないため金塚さえ押さえておけば子供たちは自由に捜せる。

ライムは戻ると部屋を移動して形ばかりの事情聴取を開始した。

「え〜と・・・お仕事は世界は多くの会社を取り締まってる社長で合ってますよね？」

「ええ、最近うちの社員にも行方不明者が続出しているため大変ですよ・・・」

このまま、取り調べは続いていくがライムは少しでも時間を稼ぐために途中でわざと話題を反らした。

趣味や昔の話など・・・事件とは関係ない話が話されていく。因みにライムは嘘しか言っていない。

「レモン・・・起きて！レモンちゃん」

牢屋に敷かれた布団で寝ていたレモンは誰かに揺すられて目を覚ました。

寝ぼけ眼に映るのは特徴的なジャガイモ頭・・・・・・・・・・ではなく水色の髪をなびかせた女性だった。

その女性「・・・・・・・・カレンは何故かくのいちの格好をしている。」

「何……？私を逃がしてくれるの？それとも、優遇接待の終了宣言？」

元々、拘束されているにしては優遇すぎると感じていたレモンは夜中に起こされても驚かなかった。

いつでも、拷問などを受ける覚悟はできていたのだから。

「そうじゃないよ……お友達が迎えに来た」

レモンは思わず目を見開いた。

お友達が迎えに来た……つまり、みんなが助けに来たということだ。

レモンはカレンの顔を見た。
相変わらずその表情は笑顔である。

「だから……何？」

だからこそ、警戒しながらそう聞いた。

自分は人質だ……まさか、家に帰してくれるというわけではないだろう。

「何って……帰りたくないの？」

そのまさかだった……。

レモンはカレンを睨んだ。

言い方が悪くなるが自分がこんな目に合っているのは目の前にいる女のせいだ。

なのに、その女がそんなことを言うてくる。

全く……意図がつかめなかった。

カレンはそんなレモンの様子に気づいたらしく服の中からあるものを取り出してレモンに渡した。

「これって……メモリースティック？」

「その中に金塚の今までの悪事が入ってるよ」

レモンはカレンの顔を見た。

そこにはいつもの笑顔はなく真剣な表情をしている。

「私の頼み……聞いてくれるかな？」

「………何よ？」

レモンは困惑しながらもなんとか聞く体制だけは保った。すでに、レモンはカレンのことが分からなくなっていた。

カレンは金塚の手下のはずだ。

なのに、金塚の悪事が入ったメモリースティックをレモンに渡してレモンを仲間のもとに帰らせようとしている。

意味が解らない……レモンにはカレンという女性が理解できなかった。

カレンはレモンの言葉を聞くといつもの笑顔に戻った。

捕まっているはずの自分に笑顔を見せている。

そこには悪意など一欠けらも感じられない。

まるで……子供に接するかのような笑顔だ。

………一応、その通りだが。

「簡単なことだよ……みんなには屋敷の中で遊んでもらいたいんだ」

「遊ぶ？」

「そつ お母さんは金塚の相手をしているみたいだからお友達と一緒に遊んでくれない？」

レモンの疑心に満ちた表情を見てもカレンの笑顔は崩れなかった。カレンの言葉から来たのは春日部防衛隊とライムだということは分かった。

「だけど、なぜ？遊ばなければならない？？」

「どう？遊んでくれる？」

「………何をすればいいの？」

レモンの返答を聞くとカレンの笑顔は深くなった。そして、一度牢屋を出るとソレを山のように持ってきた。ソレを確認したレモンはカレンのやりたいことをやっと理解できた。だが………。

「何で………こんなことをするの？」

「復讐………かな？」

レモンの質問にカレンは苦笑いしながら答える。少しづつ理解できてきた。

カレンは復讐しようとしているのだ………金塚に。

でも、？やる？とは言えなかった。

何故ならその遊びには危険が伴うから。

自分だけなら良いが……みんなを巻き込む可能性があるのだ。そこには……最悪、？死？が待っている。

「時は来た……本当は私もやりたいけど大事な？最期の？仕事もあるからね。やってくれない？」

レモンは歯を食いしばった。

カレンがやりたいことは分かった……だけど、カレンが復讐する理由が分からない。

みんなを危険な目に合わせるのだ……せめて、それを聞かなくては。

「教えてよ……こんなことをする理由とあなたの？最期の？仕事の内容を」

カレンはレモンの言葉にため息を一度は吐くが渋々？全て？を教え

しんのんすけたちはすでに屋敷中を捜したがレモンの姿は見当た

なかった。

「何処にもいないね……」

「どこかに隠し通路とかあるのかもよ」

部屋の一つで休みながら風間とネネがそう話していると廊下から足音が聞こえてきた。

五人はすぐに思い思いの場所に隠れる。

そして、ドアが開き部屋に入ってきたのは――――

「みんな……出てきて」

「レモンちゃん!？」

しんのすけが一気に飛び出した、

部屋に入ってきたのは金塚ではなく捕まっているはずのレモンだったのだ。

レモンはやけに大きな袋を持っている以外どこも変わっていない。

「捕まってたんじゃないんですか？」

「うん、捕まってた……。だけど、解放されたの……。その代り、みんなにやってもらいたいことがあるんだけど？」

「なんですか？」

レモンのいつになる弱気な態度にマサオが心配そうにそう言った。みんなも口々に「どうしたの?」とか言っていく。

「みんなで……？花火？をしましょう」

第21話 カレンの思惑（後書き）

レモン

「ごめんなさい・・・カレンというキャラの説明をお願いします」

カレン

「それはまた次回」

カゲロウ

「というわけで（どういうわけで？）次回はカレンの話を中心に書きつつこの長編の終了です。因みに・・・カレンはレギュラー化するので」

カレン

「私の応援よろしくね」

レモン

「頭痛くなってきた・・・」

第22話 終わりと始まり(前書き)

やっぱり話の内容はぐだぐだです。

第22話 終わりと始まり

「おっほほ〜い！！楽しいゾ〜」

「本当にこんなことをやっていいのかな・・・？」

しんちゃんと風間君がそんなことを話している。

風間君のいうことはもっともだと思う。

だって・・・今、私たちは室内で？花火？をしているのだから。

「ねえ・・・レモンちゃん・・・これって放火じゃないの？」

「大丈夫・・・」

ネネちゃんの質問に私はそう答えたのは良いが実際のところ全く大丈夫ではなかった。

部屋に敷かれていた豪華な絨毯の炎が酷くなつていくのを確認した私たちは火がついている状態の花火をその場に投げ捨ててその場を去った。

これは・・・間違いなく放火だ。

「次の部屋に行こう！もうあまり時間がない・・・」

そう、もうあまり時間がなかった。

私たちが花火をしていた部屋はさっきので三つ目。

最初に花火を行った部屋はすでに入ることでできない状態になっているであろう。

だが、まだ・・・弱い。

あの女・・・カレンとの契約はこの家が燃え尽きるほど？遊ぶ？
ことだから。

私たちが部屋で？遊べば遊ぶほど？カレンとの契約は達成できる。
だけど・・・それに比例して私たちに及ぶ危険も大きくなる。

「本当・・・何で協力してるんだろう・・・」

思わずそうつぶやいてしまった。

別に強力なんてせずに逃げてしまえばいい。

あの女との約束なんか無視してさっさと任務を遂行すれば良い。
だけど・・・あの女の目的を聞いてしまったから・・・。

「!?!? みんな!!この部屋を最後にするよ!!」

「くくくくおうつつ!!!!」

思ったよりも火の回りが酷くなってきた。
だから、予定よりは早いが仕上がりに入る。

「みんな・・・残りの花火全てを投げ捨て終えたら脱出ね」

みんなが慎重に頷いて私がカレンからもらったライターで花火に火
をつける。

そして、火が付いたら適当なところに投げ捨ててまた、火をつける。
同じ作業を繰り返していた。

「レモンちゃん・・・これで良いんだよね？」

「ええ・・・ごめんね。変なことやらせちゃって」

「大丈夫！！だって、これも意味があるんでしょ？」

「楽しいから構わないゾ」

「ボーーーーー…………燃える」

「うんっ！！僕もレモンさんを信じるよ！！」

みんなが元気に私にそう言ってくれる。

簡単に事情を説明したとはいえこんな犯罪行為に協力してくれるだなんてみんな、本当に優しいと思う。

だから、悪魔でもこれは？遊び？ということであの女に後を任せようと思う。

「みんな！！行くよ！！」

火が強くなったのを確認した私たちは？台所？を出た。

だが、廊下にもすでに火の手は回っている。

「レモン！！みんな！！こっちよ！！」

金塚との話を途中で終わらせてきたママがそう言って私たちを外まで誘導してくれる。

すでに金塚の今までの悪事が入っているメモリースティックを手に入れた私たちはそのまま家に帰る予定だ。

金塚自身も家の以上に気付いているはずだし…………早急に退散するのが一番だろう。

だが……………。

「ごめん！！みんなは先に行行って！！」

「レモン!!?」

ママが呼び止めるのも聞かずに私は炎の中を走った。
そして、金塚の居るリビングの部屋に入った…………。

「あ……………どうしたのかな?レモンちゃん」

そこには金塚と対峙するカレンの姿があった。

カレンは相変わらず笑顔だ…………だが、炎の中に映るその笑顔は…………目が笑っていない。

「……………どうして、裏切った!!何故こんなことになっている…………?」

おそらく、まだ状況を理解できていないであろう金塚が驚愕の表情を浮かべながらカレンを睨んでいた。

警察（に変装したママ）と話をしていた途中で突然家が火事になりその前に不敵な笑みを浮かべるカレンと捕らわれていたはずの私が姿を現したのだから驚くのも無理はないだろう。

「・・・・・・・・あなたは今まで殺してきた人たち・・・・・・・・」

炎のせいで周りの気温がものすごい勢いで上昇する中カレンが静かに話し始めた。

そう・・・・・・・・静かに。

「その人たちの家族がどうなったかあなたは理解できる？」

「・・・・・・・・何故お前がそんなことを言う？」

「私はあなたに雇われるまで小学校の先生をしていた・・・・・・・・そして、生徒の中には笑顔がかわいい女の子がいた」

いつもの笑顔ではなく真剣そうな表情でカレンはそう言う。

私はすでにその話を聞いていた。

だから・・・・・・・・彼女に協力した。

「だけど、突然その子の笑顔は失われてしまった・・・・・・・・とある悪徳企業に父親を殺されたから」

「!？」

カレンの話を聞いた金塚が一瞬苦虫を噛んだような表情をした。

言わなくてもわかったのだろう・・・・・・・・その悪徳企業が自分だということに。

「その子の母親は娘の笑顔を取り戻そうと必死に働いた……
そして、娘とも遊んだ。結果……無理な生活を繰り返してい
たせいで母親も病気になってこの世を去った」

そこまで言うとかレンは金塚を見た。

……見るものを凍らせるほど冷たい眼で。

「その子は今も孤児院で心を閉ざしたまま生活している!!」

私は自分の体が震えたのに気付いた。

私の知る限りカレンという女性は笑顔でふざけているというのが印
象に残る。

だけど、そんな女性に私は捕まり良いように遊ばれた。

そのカレンが……本気で怒っている。

「……お前はそんなたった一つの家族のためにここ
までやったというのか？」

金塚はカレンに向かってそう言い放った……震える声
で。

だけど、その言葉はカレンに対しても孤児院にいる子に対しても酷
過ぎた。

「あなたにそれを言う権利はない!!」

「レモンちゃん!!!」

スパイヨーヨーで金塚を倒すために飛び出そうとした私はカレンの
その言葉で動きを止めた。

分かっている……あの男に罰を与えるのは私ではない。ただ、何人もの人を不幸にしたこの男を許せるはずがなかった。

「あなたのやった犯罪に巻き込まれた人たちはたくさんいる……そして、そのせいで悲しんだ子供たちも」

「それが一体どうした？今更死んだ人間は帰ってこない……例えここで私が死んでも意味のないことだ」

「本当に馬鹿ですね……どうして、私が今までここで仕事をしていたのか分からないんですか？」

カレンは不敵な笑みを浮かべながらそう言う。

そう言えば、私もカレンがここで仕事をしてきた理由は聞いていない。

というか、金塚に近づくためではなかったのだろうか？

「あなたの全財産……孤児院に寄付しました」

カレンは笑顔でそう言い放った。

先ほどまでとは違って私が捕まっている時に何度も見た楽しそうな笑顔だ……ってはい？

「あなた……そんなことをしたの？」

「うん」

うんって……思わず固まっている金塚に同情してしまうほど衝撃的な内容だ。

おそらくその孤児院というのはカレンの生徒だった子のいる場所な

んだらうが……やるのが恐ろしすぎる。

「貴様ああああああああああああああああああああ
！！！！」

正気に返った金塚がカレンに襲い掛かる。

だが、その拳が当たる前にカレンの足が顔面に当たっていた。

「あ……………が……………」

綺麗に蹴りを決められた金塚はあえなく撃沈……………という
か、本当に教師だったのか疑問に思う体術だ。

「あ……………レモンちゃん。そろそろ脱出しよ」

「脱出つて……………この人どうするの？」

「すでに消防車を呼んどいたから大丈夫だよ……………今頃外は
大騒ぎになってるんじゃないかな」

「……………いつ呼んだの？」

「レモンちゃんたちが花火で遊んでいるのを見ながら携帯で」

「なんで見てたの!？」

こんなことをやろうとする直前になんてのんきな……………てい
うか、さっきまでのシリアスな空気が完全に壊れている。

私は苦笑いしながらカレンと一緒に脱出した。

「・・・・・・・・・・って、本当に来てるし」

外に出た私たちが確認したのは消火活動をしている消防署の人たちとそれを見物している野次馬たちの姿だった。

「これはやりすぎなんじゃ・・・・・・・・ってアレ？」

隣にいるくのいちだか学校の先生だか放火犯だか良く分からない存在になってきているカレンに文句を言おうとしたのは良いが・・・・・・・・
すでにその姿はなかった。

「・・・・・・・・忍者って何でもありなの？」

私は呆れながらそうつぶやいた後みんなと合流した。

「レモン~~~~~!!!心配したぞ~~~~~!!!」

「パパ!？」

みんなを家に送り届けた後久しぶりに家に帰った私を待っていたのは両手を広げながらこちらに走ってくるパパだった。
パパはまだ靴すら脱いでいない私を思いつきり抱きしめる。

「ちよっ!？パパ・・・痛い」

「本当に心配したぞ~~~~拷問とか処刑とかされなかったのか？」

「面白い忍者がいたせいでそこら辺は安全だったよ」

まあ、その面白い忍者のせいで捕まったわけだけど・・・。

「そうかそうか!!とりあえず・・・任務終了だ」

「・・・・・・・・・・うん」

私は優しく頭を撫でてくれるパパの胸の中で笑顔でそう言った。

「レモンちゃん！風邪はもう大丈夫なの？」

「うん！今日から登校」

学校の方はママが？風邪？ということにしていたらしく久しぶりに学校に行った私はすぐに友達のサヤカちゃんと話を始めた。

本当はパパが昨日の今日だから学校を休んだらいいと言ってくれたんだけど……ヘーデルナ王国に居た頃訓練ばかりやってた私にとっては学校は楽しみであり新鮮だから休みたいとは思わない。……友達もいるし。

そうやってサヤカちゃんと話をしていると教室のドアが開いた。時間的に担任かと思つて席に座るが……。

「えっ……？何で校長先生が？」

教室に入ってきたのは学校でのあだ名が？狸？であることで有名な校長先生。

お腹が出過ぎているせいでスーツのボタンが今にも外れそうになっていることに気付いているのかそうでないのか知らないが校長先生は自身のお腹をさすりながら教壇に立った。

「ええ、担任の今福先生が突然宝くじを当てて海外に行つてしまわれたので新しい先生がこれからこのクラスを担当することになります」

……はい？

凄い……宝くじを当てたことも凄いがそれで仕事を放って海外に行った先生がすごい。

ぜひともいくら当てたのか知りたい……じゃなくて、昨日あれだけのことがあった次の日にこんなことを言われたから少し驚いてしまう。

確か……あのくのいちも小学校の先生だと言っていたから。

「じゃあ……入ってきてください」

校長先生に言われて入室してきたのは水色の髪を伸ばした綺麗な女性。

その面影はあのくのいちに似ている……ってアレ？

「今日からこのクラスを担当することになった里崎カレンです。みんな……楽しく遊び……授業していきましょう」

私は思わず口を開けて呆然としてしまった。

面影が似ているどころの話ではない……本人だった。

あの笑顔も授業を遊ぶと言おうとした態度も間違いなくあの女らしい。

つまり……。

「これからよろしくね」

カレン……じゃなくて、里崎先生は私の方を見ながらそう言った。

つまり……これからはあのくのいちが担任。

……よろしくされたくない。

第22話 終わりと始まり（後書き）

カレン

「レモンちゃん語り手頑張ったね〜」

レモン

「ありがとう……じゃなくて、何であなたが担任なの!？」

カレン

「今福先生が宝くじを当てて海外に飛び立ったからでしょ？」

レモン

「………何か仕組んだ？」

カレン

「まあね」

レモン

「否定しない!？」

カゲロウ

「まあ………というわけでここで一つ軽くアンケートです。語り手をレモンと天の声のどちらがいいか教えてください」

レモン

「なんでいきなり？」

カゲロウ

「最近気づいたんだ………そういえば、これってレモンの物語

だからレモンが語り手でも良いんじゃないかと」

カレン

「今更だね………というわけで、良かったらアンケートに付き合ってください」

第23話 波乱の一時間目（前書き）

なんか書いているうちに文字数がいつもの約二倍になってしまいました。

いつもの少なさに慣れている人は読むのがつらいかも。

筆を片手に勉強しないといけないのだ。

どうして、算数の時間がサッカーの時間になったかという話が20分ほど遡る。

因みにこの時間は体育の時間ではなく完全に授業中に遊んでいることになる。

「えへっ、教科書忘れちゃった」

眩しい笑顔で爆弾発言をしたのは宝くじを当てたために私たち生徒を捨てて外国に行ってしまった今福先生の後任である里崎カレン先生……というか、つい昨日まで散々世話になったくのいちだった。

「だったら、先生。私の教科書を貸して差し上げましょうか？私は隣の人に見せてもらうので構いませんが？」

そう言うのは私のクラスメイトの東光寺アカネちゃん。

お父さんが社長らしくお金持ちなうえに頭も運動神経も良いというクラスでも人気の女の子。

そういえば、しんちゃんと同じ幼稚園にも酔乙女あいちゃんというアカネちゃんと少し似ている女の子がいたっけ？

ただ、アカネちゃんはたまに上から目線するところが傷なんだよね……因みにネネちゃんがこの前あいちゃんも似たようなものと言ってたのは秘密ね。

「うーん、それもいいけど……せっかく、教科書忘れたんだか

ていつから少年サッカー部隊になったの!?

「—————という風に、気づいたらみんな体操服に着替えてグラウンドに走って行ってしまったため私たちのクラスは急遽サッカーをやることになったということ。」

「里崎先生!?!?」

私たちがサッカーに熱中していると………うん、サッカーって楽しいよね?じゃなくて、私たちがサッカーに熱中していると不意に声が聞こえた。

動き回ってたのがウソのように立ち止まった私たちが声のした方を見るとそこにいたのは—————

「教頭先生?」

太り過ぎな校長先生とは対照的にやせすぎな教頭先生だった。

その姿が見えただけで私たちは全員静かになってしまう。

何故なら、うちの学校は校長先生はとても優しいのに対して教頭先生はとても厳しいからだ。

きつと、そんな正反対の二人が学校で偉い立場にいるから学校が成り立つんだと思うけど。

「里崎先生っ、これはどういうことですか?あなたは今何をやってるんですか?」

「何って生徒との交流を深めているんですけど?教頭先生も入りま

すか？」

「入りません!!!」

カレンの言葉にあからさまに激怒する教頭先生。

まあ、気持ちが分からないでもない……。

「あなたは教育者としての立場を理解しているのですか？あなたは生徒に勉学を教える立場であって生徒と一緒に走り回る立場ではないのですよ」

「それは聞き捨てなりませんね……」

「はい？」

カレンの言葉に教頭先生は眉をひそめる。

怒りの形相の教頭先生と笑顔のカレン……あれ？上司と部下の関係とかそんなの関係なし!？

「教師と言っても所詮は赤の他人です。まずは授業を教えるよりも先にお互いに信頼関係を築くことの方が先決ではないでしょうか？実際に担当が嫌いだから成績が伸びないという話をよく聞きます。

第一、私の信念は生徒と一緒に学ぶことですから」

断言しちゃった……。

教頭先生は怒りのためにプルプルと震えてるし……大丈夫なの？

「あなたはそれでも教育者ですか!? 教師とは生徒に勉学を教えるためにいるのです!!! 大体……」

教頭先生はそこで一旦止めると深呼吸して冷静さを取り戻して次の言葉を発した。

「たった、一年や二年教えるだけ・・・そんなのに信頼関係など
必要ない」

..... 空気が静まった。

今の発言で元々人気のなかった教頭先生の人気は少なくともこのクラスの中では壊滅的になっただろう。

たった、一年や二年・・・確かに、毎年同じような仕事をする教師にとってはそうなのかもしれない。

だけど、生徒である私たちにとっては担任とは学校で最も身近にいる大人だ。

小学校生活六年の内の一年・・・それはとても長い。

なのに、たった一年だから信頼関係など必要ない・・・そんなことを担任の先生が思っていたら私たちは一体誰を信用すればいいのだろうか？

誰の言葉を信じれば良いのだろうか？

みんながカレンの方を見る。

親睦を深めるという理由で無理矢理始めたサッカーを始めたカレン。だけど、今みんなこう思っているんだと思う。

『カレン先生もそう思ってるの？』

クラスの女子の何人かが泣きそうな目でカレンを見る。

クラスの男子の何人かが睨むような目でカレンを見る。

みんなサッカーを楽しんでいた・・・だから、教頭先生の言葉から受けるショックも大きい。

「.....失格ですね」

長い沈黙の後カレンが静かにそうつぶやいた。その表情は笑っているが目が笑っていない。

だけど、その右手は男子の、左手は女子の頭を優しく撫でている。

「今、なんといいました？」

「あなたは先生として失格だと言いました……少なくとも、担任にはなってはいけません」

その言葉に教頭先生は遂に切れてしまったらしく頭を赤くしてカレンを睨む。

最初から担任に鳴ろうなんて考えていないんだろぅが……きつと、カレンの言葉が教頭先生のプライドを傷つけたのだろう。

「あなたは一体……！？」

教頭先生の言葉はそこで止まった。

カレンが睨んだからだ。

笑顔ではなく本気で……ただ、睨まれただけで教頭先生は黙ってしまう。

「私たちのやるべきことは子供たちをより良い方向に導くことです。そして、それにはお互いの信頼関係は絶対に必要です……何故なら、子供たちが自分の話を聞いてくれない大人の話を聞いてくれるはずがないじゃないですか？」

「ぐっ……」

「たった一年……それでも、子供が成長するには大事な一年で

す。どうか、そのことを考えてあげてください」

教頭先生は何も言わない。

正直、私にはカレンと教頭先生のどっちが正しいかなんて分からない……きつと、それは人によって考え方が違うんだから。でも、だったら私はカレンの考え方に賛成したい。

「……ですが、あなたが授業を放棄していることは事実です。これを教育委員会に訴えたらあなたは……」

「あらっ？先生は何を言っているんですか？私たちは今、授業中じゃないですか？」

「……はい？」

カレンの突拍子もない言葉に教頭先生が間抜けな表情をしている。因みにカレンの言葉を理解できない私たち生徒も同じような表情をしていることだろう。

「今日は私が担当して初めての授業になるため交流を深めるために急遽授業を変更して体育にしてもらったんですよ……ちゃんと校長先生の許可をもらった上に書類を作成して提出しましたが……まさか、教頭先生。良く調べもせず一時の感情で文句を言っていたのですか……？」

教頭先生は開いた口がふさがらないという表情をしている……
ていうか、私たちも。

それに対してカレンは意地の悪い笑みを浮かべている……
最初からこのこの状況になるのを待っていたのか！？

「では、教育委員会には後程私の方から言っておきますね……もしかしたら、それが教頭先生が権力を使つての授業妨害の問題になるかもしれないが……」

「ま……待ちたまえ!!」

途端に教頭先生は慌て始めた。

爆発しそうになっていた怒りはまるで消えているらしく必死な表情だ。

「ねえ……レモンちゃん。何で教頭先生はあんなに慌てているの？色々とおつたけどこれって最初から授業変更のことを言わなかったカレン先生にも非があるんじゃないの？」

隣にいるサヤカちゃんが教頭先生に聞こえないように私にそう耳打ちする。

確かに、カレンが最初から授業変更のことを言えばよかつたんだからカレンにまるつきり非が無いとは言えないだろう……いや、カレンが一方的に悪く言われる可能性だってある。

「ほら、教頭先生が一年や二年教えるのに信頼関係は必要ないって言つてたじゃん……もし、そんなこと言つたのを教育委員会やPTAにばれたら教頭先生の立場が悪くなるかもよ」

「あゝ」

私の言葉にサヤカちゃんが納得したように頷いた。

そう……もし、今回のことが大事になったらカレンは間違いなく教頭先生のアノ発言を口外するだろう。

そんな言葉が教育委員会……ましてや、私たちの父兄で構成さ

れているPTAにばれたら教頭先生だってただではすまない。だから、教頭先生は必死になって今回のことを無かったことにしようとしている……んだと思う。私がそう考えている間にも教頭先生は必死に説得をしている。

「里崎先生……今回のことはお互いに非があつたということでも水に流しませんか？ほら、あなただって困るでしょう？」

「あら……何を言っているんですか教頭先生？私は先ほどの話で困るようなことは一言も言っていないですし先ほどのことは今後の教育についてぜひとも先生方と話し合うべきだと思いますよ……教育に信頼関係が必要か否か」

「うっ」

ああ、教頭先生が頭を抱えているよ。

なんか、いつも上から目線で自分が正しいと思っているあの教頭先生とは思えない……。

「まあ……でも、今回のことは水に流しましょうか？……
……今後のために」

カレンが眩しいばかりの笑顔でそんなことを言う。

ていうか、完全に教頭先生の弱みを握つたし！

教頭先生は力なく頷くと頼りない足取りで校舎に戻っていく。

……これが、赴任一日目の教師のやることだろうか？

「じゃあ、サッカーの続きをやりましょうか？」

たら小学生の私たちではほとんどの子が体力切れを起こし二時間目も元気にやれるとは思いつらい。
だけど、実際は教頭先生の登場のせいでみんな……なんと
うか、消化不良……え〜と、つまり、あのね……はい、
遊び足りないんです。

「そんなことはないよ〜」

周りの視線を一手に集めながらもカレンは笑顔でそう言い放った。
だが、コトンという音と共に何かが地面に落ちる。

ボイスレコーダー

要約すると音声を記録する機械……それが、カレンのポケットか
ら落ちた。

「あはっ、落ちちゃった」

そんなものを見られても尚笑顔を浮かべるカレン……だが、私
は一つ確信した。
いや、みんなも全く同じことを考えているだろう。

「……………まさかの全て計画通り!?」「……………」

……………うん、私も思わず声に出してしまった。
いや、ていうか……一字一句同じことをみんなで言うだなんて
結束力の高いクラスだな。
……………うん、何だか少し、教頭先生が可哀そうに思
えてきた。

かくして、一時間目をサッカーと先生同士の話し合いで終わらせた
私たちは二時間目をケイドロをやることになった。

・・・・・・ていうか、カレンって元々小学校の先生だ
つたらしいけど昔からこんな破天荒な授業をしてたのかな？

第23話 波乱の一時間目（後書き）

カレン

「いや、楽しそうなクラスだね」

カゲロウ

「全くだ……おかげで、何か真面目になっちゃったし。どうしてくれるんだ!!」

レモン

「自分で書いという文句を言わない……ていうか、あなた、本当にまえの学校だとどうしてたの？」

カレン

「えっ、今と変わらないよ」

カゲロウ&レモン

「「よく首にならなかったな（ね）!!」」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6019s/>

クレヨンしんちゃん～スパイの日常～

2011年12月24日09時49分発行